

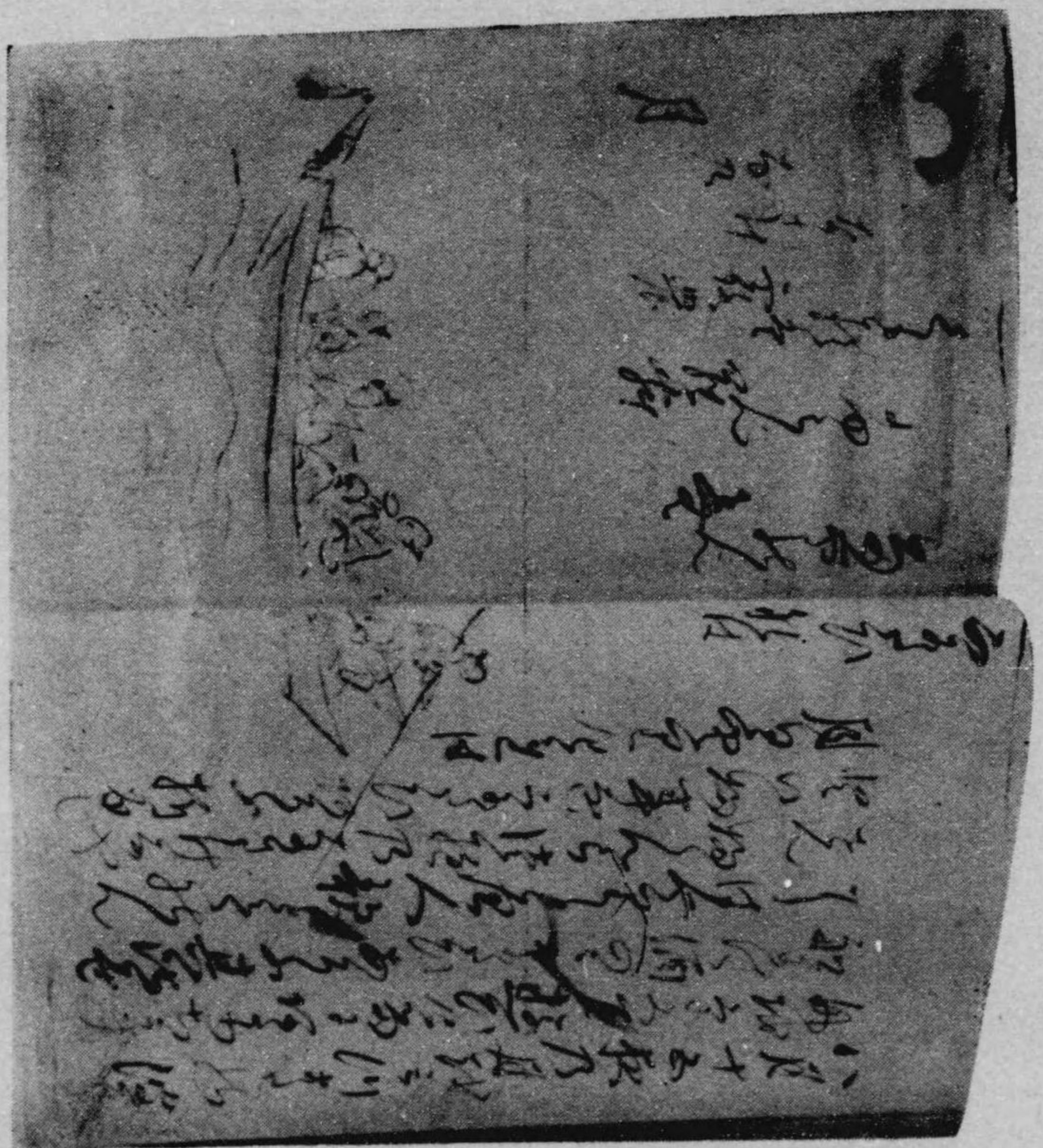
製器等を記載す。繪事の種類古より漸く精工を極む、當今諸學盛に開くると一般也。

此書は舊拂郎察國ホウヒールと云人の所著を譯す、ホウヒール四十年來の經驗を以て初學の爲作る所と雖、亦達者の爲にも大に補あり、又達人のみ補あるのみならず、采具、性質、製法、洗法、燒法、等微細に記せば、彩色製法器具製作の職をなすものにも大益ある也。

蓋し作者ホウヒールなる者は唯畫學に遯なるのみに非ず、術藝も精工にして兼備の人たる故の經驗發明なれば、一々取用するに足れり。當今行るゝ畫書の説を取加るに、己の明悟を以てすれば、其書浩繁にして四冊に及ぶ、又中に微細の銅板あり、已に發兌に及ぶ。

「ボルネヲ」は或は「ベレヲ」と云、ヒユラ、ケレマンテンと云ふ、國人は「ベレヲ」と呼ぶ、又たヤツケル人は「バルヌイ」と云ふ、新和蘭に近き地球中大島にて亞細亞に屬す。シコントの海門半島滿刺加の東に在て、南緯度四度、北緯度七度半、東西經度百二十七度

三十分より百三十九度三十分間に互る、其長さ十分に百二十五里、幅員百七十八里、こゝを以て其地面拂郎察全國より甚大なり、實に「ハンテンホス」(人名)の説の如し。此島は千五百二十一年ホルト人、ゲラキユス、ネツシセ」より見出せり、但千六百九十年前ホルト人バンユーマツシングと云(ホルト人、蘭人より先に見出し來住むことは後なりと云所に落つきぬ。ネーテルランド人は已に千六百四年に「シヨツカダナ」と云所を領分にせしなり、今に至て此島海岸より十一二里深き奥地は歐羅巴人に知れざる也。是は林と廣野にして能き道路乏く且土人の暴戾にて其進むことを妨げたる也。北より南へ向き海岸に添ふて一座の山あり、多くの水晶を産す、こゝを以てネーテルランド人は水晶山と名く、山頂の一つは火山也、これを「チガフラ」と名く、概して島國多分火山多はげしき地震多きが如く、山の麓に大なる湖水あり、是より「ペンサル」一名バンイルマツング、一は「ボンチャアナ」一は「ラハ」「サンバス」「ヨッケン」等の諸の河生ぜり、こゝを以て年々海岸卑くなり、地濕にして不宜也。地熱地なれども萬の海風によりて涼く、又雨多し、且晝夜一般に揃ふ事にて大に宜敷氣候なり、但し濕氣あり甚不宜、此處には唯二氣候あり、則日照時と、雨時と也、又颶風及不

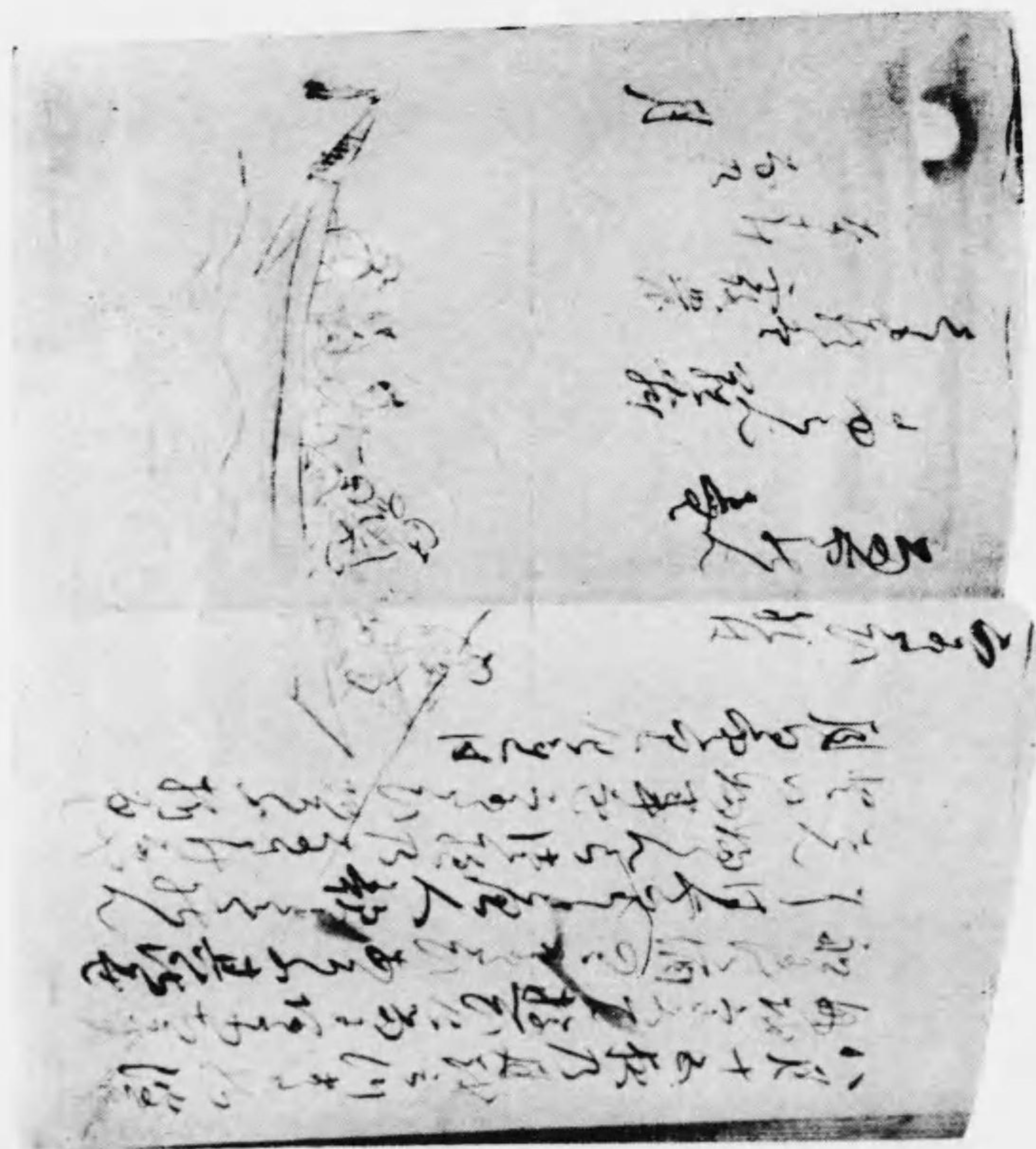


第三番

露光量違いの為重複撮影

天気も稀ならず。産物は金剛石其中には二三十より四十カラータン程あるあり、  
 金多く別而ランダック、パンユールマツシングの内は多し、鐵銅錫も亦あり、錫には  
 鉛を交へカリンと名く、北岸には眞珠其他砂糖、胡椒、肉豆蔻、丁香、桂子、米、生姜、ペタル  
 ト、亞細亞に比なき龍腦之は知れざる木よりヤニの性流出す其を年々四千五百貫  
 目送り出す、麒麟ケツ、安息香、杉及他の良木并に諸材木甚多し、支那人共こゝに來て  
 其船を造營す、又能き南果、綿、竹、スハンセリト、西國米、食すべき鳥、能き天堂鳥、ヘリ  
 アル、蟻、狸々、ボンゴス、象、虎、大なる野牛、ゾア、ネン、水牛、魚、大龜、蛇、アツリカルトス、此  
 島の住人を三百萬人とし又五百萬人とす、其一部はネケルスに屬す。多く奥地に  
 住居せると見ゆ、之をエグハンスとも云、ビヤシヨウス又は、イタールス、又は、タヤツ  
 ケルスとも名づく。此數多からず、而して甚不開して作業を不爲、誠に暴戻奇妙な  
 る事を用ゆ、たとへば、婿が婚禮する爲めに數人の首と嫁の足下に拜伏せしめる也、  
 其を得る爲に婚親類共に林に隠れて居、能き旅人を襲殺し、其首を新婚の家にさら  
 す、これで人首をかざりたる村は可憐様子を保つ、但しこれにて隣城の者と戦争不  
 絶、この故に人民の蕃息に大にさまたげを爲すなり。奥地に住居するものは、アレ

天氣も稀ならず。産物は金剛石其中には二三十より四十カラテン程あるあり、金多く別而「ランダック」「パンユールマツシグ」の内に多し、鐵銅錫も亦あり、錫には鉛を交へカリントと名く、北岸には眞珠其他砂糖胡椒肉豆冠、丁子、桂子、米、生姜、ペテルト、亞細亞に比なき龍腦之は知れざる木よりヤニの性流出す其を年々四千五百貫目送り出す、麒麟、ケツ、安息香、杉及他の良木并に諸材木甚多し、支那人共こゝに来て其船を造營す、又能き南果、綿竹、スハンセリト、西國米、食すべき鳥、能き天堂鳥、ヘリアル、蠟、狸々、ボンゴス、象、虎、大なる野牛、ズアーネン、水牛、魚、大龜、蛇（アツリカルトス）、此島の住人を三百萬人とし又五百萬人とす、其一部はネケルスに屬す。多く奥地に住居せると見ゆ、之を「エグハンス」とも云、「ビヤシヨウス」又は「イタールス」又は「タヤツケルス」とも名づく。此數多からず、而して甚不關して作業を不爲、誠に暴戾奇妙なる事を用ゆ、たとへば、婿が婚禮する爲めに數人の首を嫁の足下に拜伏せしめる也、其を得る爲に婿親類共に林に隠れて居、能き旅人を襲殺し、其首を新婚の家さらす、これで人首をかざりたる村は可懼様子を保つ、但しこれにて隣境の者と戰爭不絶、この故に人民の蕃息に大にさまたげを爲すなり。奥地に住居するものは、アレ



第三卷

奥地中記より

ホレセンと云種類、是は色黒くして、タヤツケルスより耳少し長し、海岸に多く住居するものは近島の極貧しき者の集り也。即ちマレイス、爪哇人、食レベス人并に支那人、此支那人が参り交易を支配し、其性親しみなく、義に戻りて、歐羅巴人奥地を知らんと欲而次第々々に心用ゆれども、さまたげを爲す。云々以下略。

### 狂歌

たれをかもしる人にせん頼母子もむかしを今の事ならなくに  
ちとせまでかざれる我の不しん心君に引かれて善光寺まゐり  
やかずともかゝはもへなん女郎かひたゞ友たちにまかせたらなん  
五月雨にお客さびしきうなぎやはやくやもしほの身もこがれつゝ  
行列も吉田のやどのたて道具ふりゆくものは我身なりけり  
かなぶつの光りなればや水のみとわがたつそまの墨ぞめの袖

### 柿本人悪る

ほのくとあかしの油これきりにしまがくれ行機をしぞ思ふ

### 氣のつら行

さくら色ほる醉がほはさむからで内にしられぬ火ぞふりにける

山邊のばか人

馬鹿なやつ沙満ちくればあぶないに蘆邊をさして網打ちわたる  
梅柳あらそひさける春を見て外山のかすみたすもあらなん  
ながらへば子にさへばかにさるゝ身はうしとみし世ぞ今はこひしき  
行先はまつ毛の如く近すぎて見ること出来ぬ地獄さくらく  
又と世にあるものでなし過去未來源左衛門の舞のなりふり

俳句

小座頭の人をかけぬく時雨哉  
猫のこひかまわぬ月のくもり哉  
初午の中を流るゝ隅田川  
武藏野の果はありけり午まつり  
行く春も来る春あれば我なかず

夕立を上見る草の勢ひ哉

こむな日に軍もせしか花の山

飛込むで月日落つく花の春

鶯の身はかくれ居てなきにけり

留守とおもへばくさめする五月あめ

鳶の輪の中に蠢く田打かな

夏の月駱駝の小屋のとれしあと

行秋や薪一把も庭ふさげ

河鹿鳴や木の間の月に河わたり

青柳をしらぬ御顔や角大師

竹の根に水さらくとしぐれけり

穂かきして浮世かましや夕紅葉

それは我師走の句なりいそげ人

紙子着てねぎさる役にあたりけり

削掛重荷おろせしひとたばこ  
吸ものゝ上を渡るや春の鐘  
襟さむしこんな夕にさへ雁は行  
五左衛門に明日の道問ふ董かな  
石川も人は通らず渡る雁  
草花やともすれば人の垣のぞき  
有明や石川わたる旅がらす  
霜の月山椒のとげも見えにけり  
板の間の釘もひかるや夜のさむみ  
枯柳乞食のくさめ聞えけり  
大雪や鼠ひと聲ひるすぎて  
大井川に喧嘩もなくしてしぐれけり

月色照高低

くもりなき御世の恵も海山もくまなくてらす秋の夜の月

微月泛江上

蘆間もるかゞりをそれと弓張の月はるゝかたにかへる釣舟

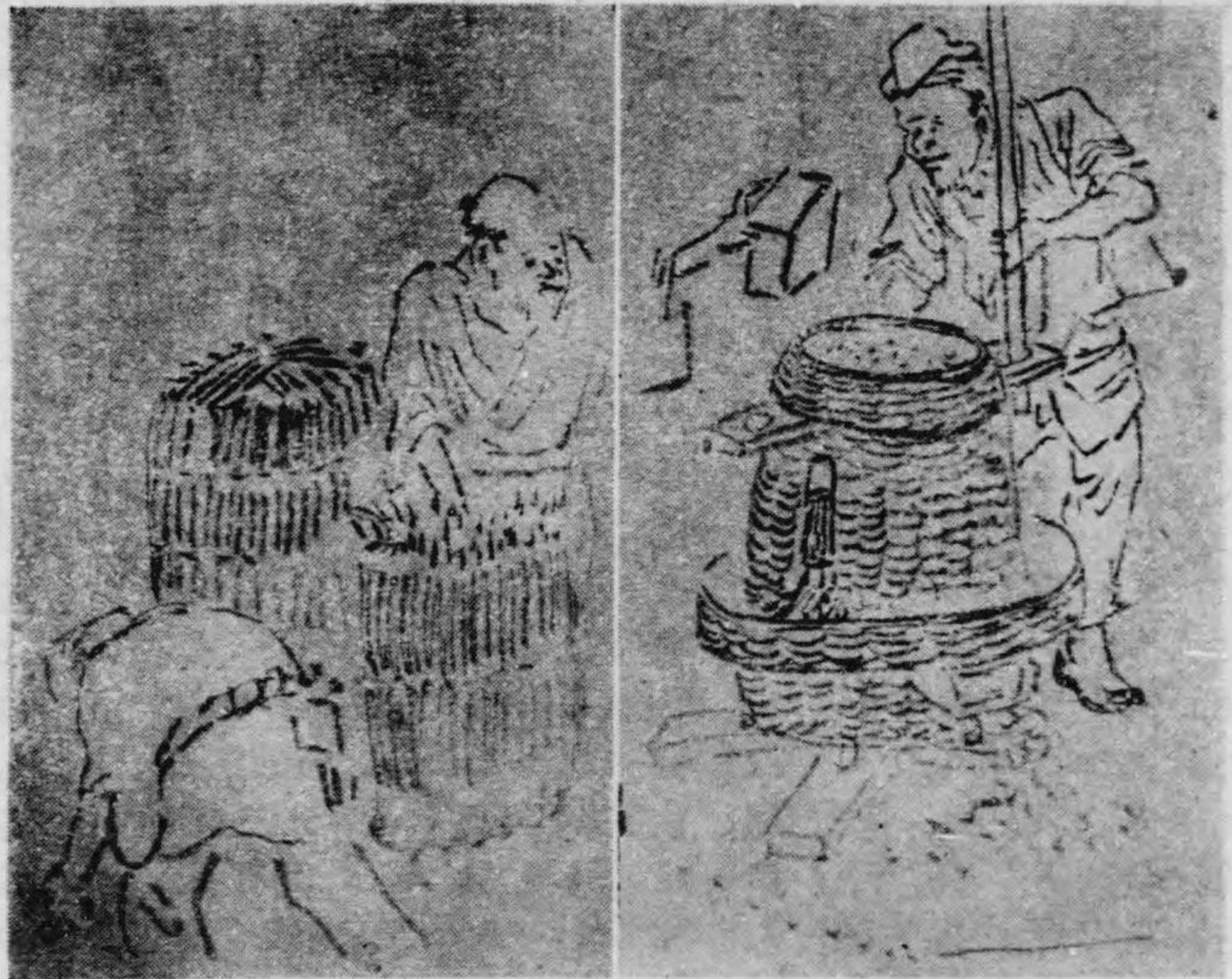
夜照高閣

樓の秋はいづれとわかねども雲の上にぞ月はすむめる

# 門田の榮

此書は先生が大藏永常の談を通俗的に編輯し大藏の名を以て田原藩にて出版し領内に分ちしものなり

國富民も豊なるいとま、御國を照します伊勢の内外の御神に詣で、序なれば幾内を一見し、金毘羅宮島をもおがまんと、下總なる農夫唯ひとり風呂敷づつみに國風の長脇差も鄙びたるが國を出しより早十まりの驛路にもなりぬれば、尾州宮の驛に着て傳馬町なる煙草屋といへるに宿りぬ。同じ宿に三河國の人とて是もひとりなりけるが下總の人に語りけるは、我此たび不圖思ひ立伊勢參宮し、それより大和へ出一見してふるき都の跡をもたづねさぐりて、紀州へ廻り高野山へ登り又和歌のうらなをながめ大阪へ至り、名にしあふ繁榮の地なればしばらく滯留し、調へものをも致し置夫より船にて金毘羅へまゐり、又安藝の宮島より聞及びにし周防の錦帯橋を一見し、中國路を経て播州を廻り大阪へ戻り、晝船にて淀川の風景を詠め伏見へあがり、京都へ出數日逗留し諸寺諸山を拜し、江州より美濃路へ出國へかへる

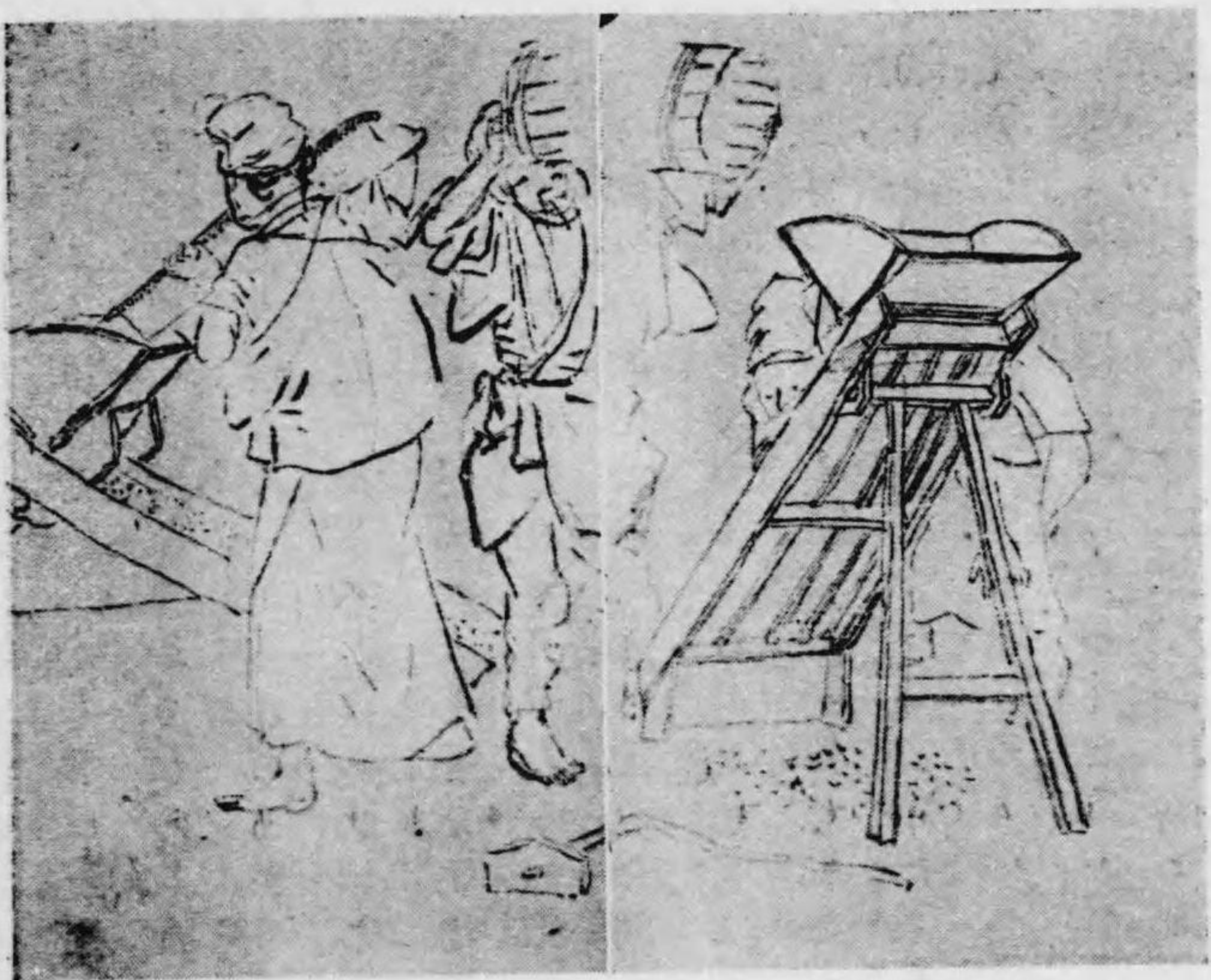


べしと語れば下總なる男大ひに喜びをのれもとよりその仰らるゝあたり見廻り歸らばやとおもひ立しなれば誠に幸ひよき連なり同道いたさばやといへば、三河の人もともに喜び打つて翌朝船に乗れば、諸國の人我もくと乗つどひ壹疊の借切あり半疊のかり切又は乗合として備中の足と播摩の片足駿河と豊後を組合せ、酔を潰たる有さまはさながら淀川船の乗合にことならず。又かり切のかたには宿より辨當或は火鉢土瓶等を持ち來り、御機嫌よく然らばさらばの聲もろとも、纜をときて漕出せば皆々安座して一禮し中に五十位の男と四十

ばかりの男と一疊を借切て座しむたり。下總と三州の男是も兩人にて一疊を借  
 きり隣に座し居たり。時に五十計の男口をひらひて扱今日日は日和も麗にて御互  
 に祝着せり、我は攝津國の農夫にて此度江戸へ下り凡彼地に一月も滞留し用事の  
 隙々に御府内其外をも一見せしが、聞しにまさる繁昌太平の有さ  
 ま實にいさましき事どもなりといへば、同席に座し居たる四十ばかりの男我は九  
 州の者にて農業のかたはらに小商ひをいたしはべるが、國産のものを大阪へ登せ、  
 夫より江戸へ積まはし賣はらひ歸りがけ也、仰のごとく今かゝる昇平の御代に逢  
 ひ奉る事の有がたさには、荷物は前に積み送り遣せしに恙なく着し居たれば、早々  
 商ひて代金は大阪まで爲替に取組遣しければ是又安心なり、如此自由自在なるも  
 全く治る御代の御蔭なりといへば下總なる男年は四十四五歳とも見えけるが各  
 方も國恩の事を仰らるゝが仰でも仰ぎ歡びても喜ぶべきは此一事なり必おろそ  
 かに思ふべからざる事也。さて我と此同席に居給ふは三州の人とて、夜前宮にて  
 同宿し承れば我と同じく參宮より金毘羅宮島をかけて參り給ふよしなれば、則今  
 日より同伴の契約せしなれば、永き道中おはなしも追々承るべし、御兩人は九州と

津の國ときけば此船かぎりの別れ也、扱此船の着する迄は退屈致すべし、西國幾内  
 の珍説もあらば聞せ給へかし、我は農夫の事なれば土ほせる事より外しらざる也  
 然れども世間の雑話は又おもしろき物なれば、各々語り給らんやといへば三州の  
 男膝立直して云やう、一河の流れも他生の縁と申し、九州は唐人の着する地なれば  
 定て異國の話しもあるべし、さかまほしさよといへば津の國の人いへらく、其許に  
 は三河とあればいとなつかし、拙者若きとき諸用ありて三州へ參り所々へ逗留せ  
 し事ありしが、頃は凡九十月なりき先稻を刈を見るに、皆水田の中に入り、刈家に持  
 かへり、切株の未だぬれて水の垂るを其ま、扱て干あげ、扱ずりし田は乾す事なく、  
 水を入れて麥を蒔事なし、尤江戸近邊夫より東國も同じ事にて田には水をはりて麥  
 も油菜も作る事なしと聞いつぞは此理を承らんと思ひしに、けふはからずゆるゆ  
 る三河の人に斯御目にかゝるは不思議也、すべて三河より東の國には右のごとく  
 して刈給ふ事やらん聞せ給んやといへば、三州の人をさし置下總なる男抽ん出て  
 いへらく、僕が國にては田の水を九月におとし十月の末より霜月に至りて刈處多  
 し、随分田に久く置など實入よきとて斯する也。又刈たる跡の田は打おこし土を

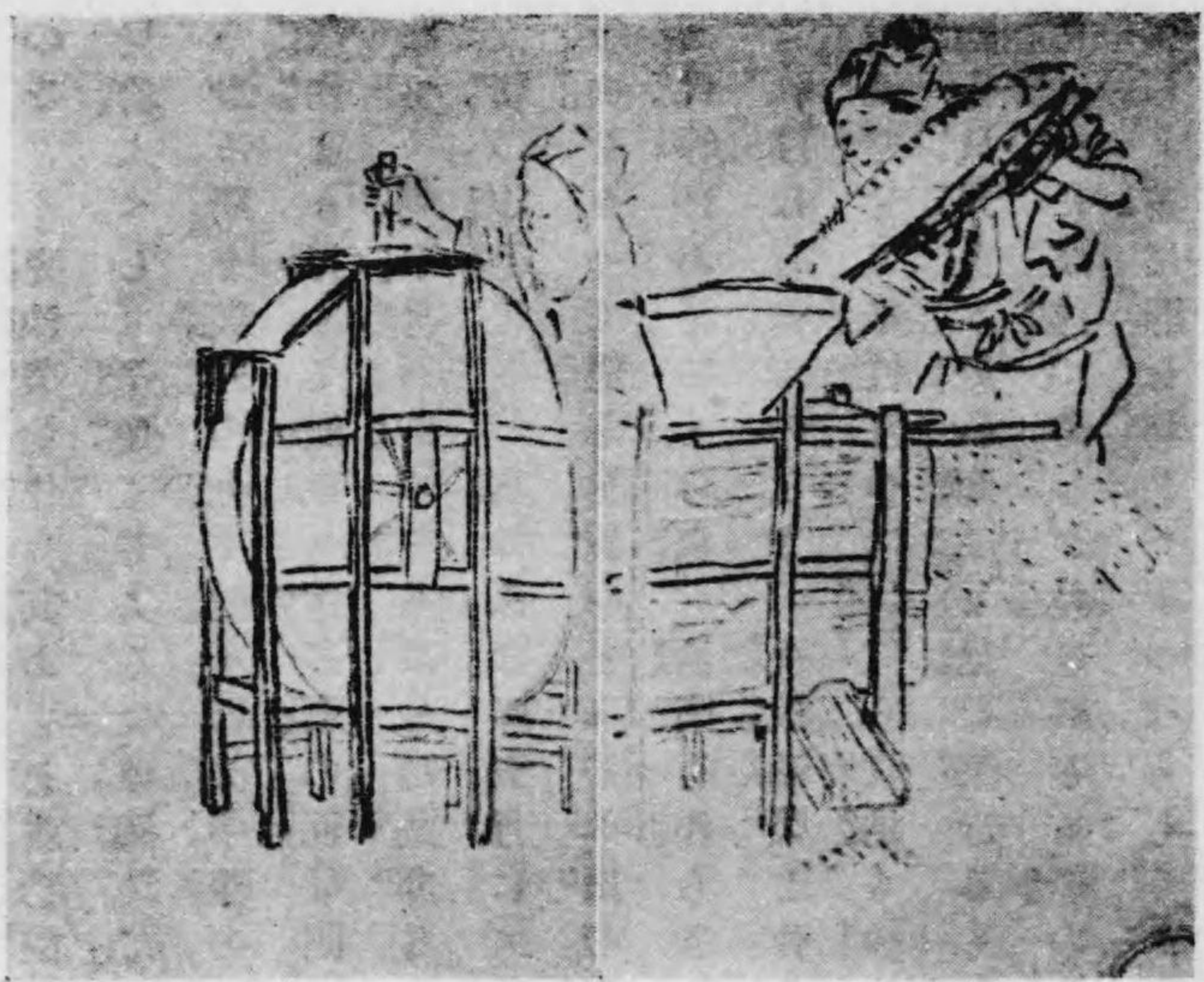




乾かす事をせず生土をくだき麥をまく事あれども、多く水田として翌年田植るまで其まゝおく事也近年幸手くりはし邊去御大名の領分なりしが、領主より稻を刈て竹にて臺を拵へ干さる米は請取事なしと御觸ありしかば、百姓一統大に困り先領分村方にある所の竹藪は大體伐盡し其餘は他所より買入て掛干の臺とせしが猶足ざるは領主の國許より廻されしかば、残らず田の中へ臺をこしらへ掛て干けるが、其年は至つて雨しげくして隣村の他領は稻を刈て其田に干けるゆゑ水滞り稻を萌しけるまゝ、米性至つてあしく掛干たる米とは壹石に

付銀拾匁ほど直段下直なりき。掛はしたる米はいつもの年のわりより直段三四匁も高直なりけるゆゑ上下にて右のごとく相違したりき。掛干たる村は領主より迷惑なる事を被仰付差あたり掛干の竹材に困るほどさまゝのしりたるが、一粒も損じ米なく收納するのみならず、例年豊作の年より米多くとり入賣直段よかりしとて悦びけり。掛てはしたる米に艶あり青米なく、粗ずりにくだけ米なく搗べり少なく飯にたきて殖よく艶あり口中に入りてふうわりと餅米のごとく和らかにして味ひよくはらのへり方までも違へりといへり。始に引かへ奉行を拜して悦びけり。僕此事を云て我村かたに勧めけれども我村は彼村とはちがふなど、さまゝ云ぬけ中々承引せざるまゝ、我ばかり其通りに行ひけるが年々よき米をとり直段もよく賣事也。誠に仕様もあればあるものなり。則其掛干の事を委しく記したる豊稼録といふ書物あり是を調へて見れば刈やう掛様まで手とりてをしふるごとく認めあり、求め見給ふべしといへば、三州の男津の國の男にひかひて成ほど各方仰の通りかけて干ば宜しきと申事は粗聞つたへぬれども中我在所にては信用致さず、剩へ津の國の人の御申の通り水の中に入刈て其水

はおとす事なく田植る迄置事也世間にいふ少々の金を設けんより冬田に水をは  
 れといへるを守り乾かせば麥をまくによき田までも水を溜おく也と語るを九州  
 の人最前より口を閉てゐたりしが膝すり寄て先刻より各方の御咄し甚だ面し  
 ろく承り候。我國も右稻をかけて干事なれども誹諧の題にもおとし水といふ  
 事あれば水は早く落す事と心得九月より乾かしおけば刈ときは田面よく乾き  
 草履をはきて入くらゐに成り居れば刈て其ま、其田にひろげ三四日も晴天には  
 し、則其田に薙を敷三方は屏風を建たるとく圍ひ其中に稻打棚といへるもの  
 をすゑ、それにてたゞ落し、又刈は三四日はして土磨にてする事也。又は刈て右  
 のごとく致し一先とり入置田を牛にて犁せ十日ほども乾かし、塊をくだき畦を  
 つくり麥をまき成は油菜を植仕まひて右取入たる籾を取出し又干て擲立るもの  
 もあり。右にいふごとく九月上旬より田水を落し畑のごとく乾かさるはなし。  
 されども腰迄もはいる深田は水を溜置ども、中深の田は幾内と同じく掻あげて畦  
 を高くし麥油菜を作る也と語れば津國の農夫いふ、御三人ともよく農事には心が  
 け給ふものかな然れども皆むかしより斯仕來たるなど、先祖よりの仕來りにな



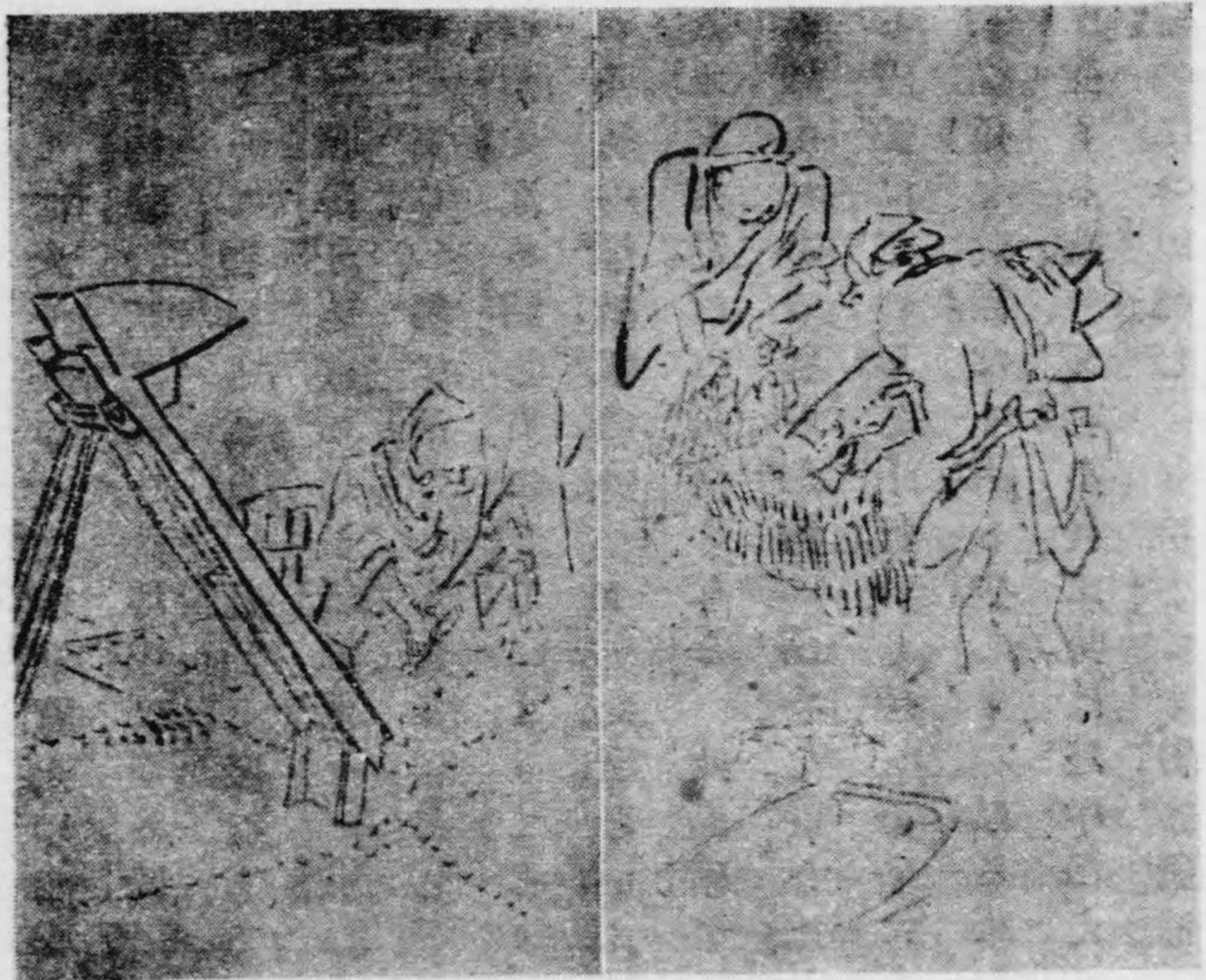
づみ外によき事ありて斯すれば現在收納も多く聞ゆれども、只頑に心得給ふゆ

えと見えたり。是農人氣質とてよき事  
 也。夫農作の收納は誠に天の賜なり、  
 夫を仕きたりになづみ一粒なりとも餘  
 分に取上る事を心がけず、且なさるは  
 冥加を知らぬ人とも云べし。夫をかぞ  
 へいは、先今論ずる深田にもあらざる  
 田に水をはり置一作ばかり取るは何事  
 ぞや、下作をするものは稻ばかりを作り  
 ては徳分はなきもの也。間作の麥か油  
 菜を作らざれば得分はなし、乾田に水を  
 溜おくは、則天の賜を請ぎるともい  
 ふべし。田に水をはらざれば稻よくで  
 きざるものなれば、西國中國四國畿内邊

のごとく麥油菜を作り、其あとを耕し田植して關東にまさりてよき米を收納事を見給ふべし。僕兼て考ふるに、東國にて右いふごとく水田にいたし、一作ならでとらざる所を、畿内の如く乾かし又中深の田は畦をかきわけ、油菜を作り油を搾れば、畿内より搾りて關東へ送る所の油は關東にて作り出すべきものを見過しにするは、歎敷事也。時の至らざるは是非なきもの也。油菜は農人作らずして叶ざる大切の作物なり。其ゆゑは四五月には農家には錢乏しきもの也。故に油菜を作り夫をうりて肥しを買ひと、のへ田の肥しを存分に入、又田植の人足雇賃祝ひの酒代等にあてるもの也。油菜を作らざる所にては肥し代は借用するか何とかせざればならぬものなり。夫故油菜を作らざる所は肥しを用ふる事すくなければ、田地やせて米性うつけ、自ら收納も少なく蝗生ずるものなり。扱御兩人の御國も只天より恵み賜はる品を請ざるも同然といふべし。此水田乾田の論談と一朝一夕には述べつくしがたけれども、船の着するは餘程間もあるべければ委しく述べしと、茶に咽を潤ししかつべらしくかまへて、扱各が穀物草木は何が育てあ、の如く成長すると思し召候や。定て土と肥し水とが育つるとおぼし召べし。左

様にては大やうなり、先水油鹽土の四ツにて生育するといふ中に肥しとなり育つるは油鹽の二ツ、油とは地中にある所の油なり。其油を根より吸わけ葉さきまでめぐりて養ひと成也。此油を吸ひとるといふ證據は、大根をおろし紙にひき乾かして雨障子とするに油紙に同じ。花さき登りたる實を搾れば油出る也。すべて木の實草の實に油のあらざるはなし。是は地中にある所の油を草木の根がすひ取葉先迄も潤し實に止るによりてなり。こゝを以てしるべし。又鹽とは地中にある所の燐硝氣の鹽なり。此鹽といふは古家の床下の上土をとりて水にたらし、其水を煮詰れば燐硝となる。此燐硝をるつぼの中に入煮詰れば鹽となる。此ゆゑ地中にある所の燐硝は萬物を養ひ肥しとなる所の鹽とは云也。又同物といへる證據は、菜の葉を干乾かし焼てあくにたれ、其あくを煎じつむれば鹽となる、此鹽と燐硝を焚詰たる鹽と少しもかはる事なき同性の鹽なり。然れば燐硝は地中より生ずる鹽にて物を養ふ鹽は地中のえんせうにて、同物なる事明らか也。扱此油鹽の二ツが肥しになるとても、譬ば藥種を口にいれかむともきく事なし、是を水にて藥氣を煎じ出して吞ば、其水につれられて肉中に廻りてきく也。然らば水は媒

役、また物を養ふ取次人なりさて土は宿をかして草木の根をおろさせて、天地の氣



三七六  
を程よく請させ生育させる役にて、土が肥しにならず、萬物を養ふは右にいふごとく油と鹽にて又育るものは土と水也。人間も同じ事にて穀物の養ひありても、水にて焚ざれば食する事あたはじ人間は油鹽の氣の備りたる穀物が肥しにて、家居は草木の根をおろす所の土と同じ事なり又人間は胃は食物のたを下にし口を上にして食す、草木は根より吸あぐるものゆゑ口を下にし胃を上とす。○又乾き土壁土を田に入れば肥しとなるなり。すべて乾きたる所には燂硝の氣集るゆゑ乾き土を入れれば肥しとなる

は土が肥しになるにてはなし、燂硝が肥にきくなり扱其燂硝を作ら前にもいふ如く、古家の床下の土をとるか、又作りえんせうとしてごもくをつみて、上に家根を貫おきて、其ごもくの土となりたるよりとる也。作りえんせうのこしらへやうは、農家培養論尿の床下にするす扱右にいふ燂硝は山も平地も同斷に地の内より日夜蒸出す氣に保ちたるものなるに、床の下ごもくの下に集るといふ理は、外は雨がかり水が流るゝゆゑ、燂硝は水に解易きものにて、水に流され又たまり水も空氣に吸あげられて露となり雨となるものゆゑ、地より蒸出す燂硝を雨と水に奪るゝなり。床の下ごもくの下は、雨水が流れぬゆゑ、其土にとまるとなるなり。今水を田にはれば、其地より出る燂硝が其水にとかさされ行か、空に昇りて肥となる事なし。乾田にすれば雨はかりて、床の下ごもくの下のやうにはなけれども、水をたへながれ行が如くに、皆盡果はせぬ也。されば床の下古土又は芥を積おきたるなどは、至極の肥となるにてはなきや、此理を以ておしてみれば、随分水氣少くして置ほど、土に燂硝が止りて肥しになるに相違なき也。○又幾内邊にて半田と號し、田土を香盤のごとく搔あげ畑をつくり、其所には綿あるひは麥又は油菜を作り、ひくき所の田には稻を作る也。三年もかくの

三七八  
ごとく作りて、又元のごとく畑をくづし一面の田となし作れば、其年肥しを入れる事三分一にて宜し。又は入ずとも稲よくできる也。是は畑になりたる乾き土が肥しに成といひ傳へり。是等を以て土は乾かすが宜しきに相違なしといへば三州の男口をとがらして曰、さて田を乾かす事至極尤に承り候へども、我等が在所にては左様になりがたきわけあり。西南は伊勢の方にあたり山なく、大難なれば九月にいたりては此方より日々吹風つよくして稲を吹あらすゆゑ、田水をおとせば、葉乾くがゆゑ、稲の穂乾きて風の爲に吹切られて、初を田の中へふきちらす也。故に水田にいたし置ざれば、大きに損毛多きによつて水は落す事なしといへば、津の國の男いふ、夫は右にも云ごとく、田土うつけ油鹽の氣うすきと肥しを入る事少なきがゆゑと覺ゆ。風の業のみにあらず、津の國は勿論西國邊にても、西に山なき海邊は大風ふきて、稲を吹たす事はあれども、穂ちぎれ落る事はなし。肥しの足らざるは切る、事あるを見及び又云も傳へたり。○此論をいへば、萬物のうち金玉土石は、自然に合して體を成ものにして、外より養をとりて生ずるものにあらず、人の身體より、鳥獸蟲魚の有情のもの、草木の非情の物も、其體生死あるものは、生力

といふものをうけて、其力によりて水油鹽土の四ツのものを結びて體をなすものにして、此種類は其形體を造る根元は、唯細き糸すぢにして、其糸すぢが集り凝て體となりしものなる事は、木竹の類を打くたきてしるべし。さて其糸筋につよきと弱きとありて、差別は其糸の中悉く空にして、管になりて、其中に含む所の水油鹽の養ひの多少によるもの也。今稻を掛ほしにする時は、穂の方に晴氣がくだりて穂にちかきしべ、初つなぎの細きしべ、皆精氣集りて強きゆゑ、風にもまれて吹きれる患なし。又乾き田にして油鹽の肥つよければ、此糸筋となる根元の種の養ひもよく、又其管の中にくむ精氣も足りて吹きさらるゝ氣づかひなし。況や二作をとりて肥しの手あても十分なれば、なほよく、理ならずや。○又水田の濕氣つよきは、藥弱りて風に吹切るゝ理あり、しめりが藥となり、糸筋を弱らすといふ道理をくはしくたとへていは、天文者の用る此世界の空氣の燥濕を計る機械あり、是は髪の毛を藥の灰汁にて煮出し、油氣をとりて車にしかけ、其末に少き錘をつけ、しめり髪の毛にしみて、髪の毛伸るときは、錘り下り車まはりて、其車の眞木にある

三八〇  
劔さきが濕るといふ印の所を指さすなり。是濕るときは伸び、燥くときは縮む、伸るときは弱り、ちゞむときは強き事自然の道理也。水田は稻に自ら濕り多し、べ弱く少しの風にも吹きられ、水をおとし、燥かせる田は、濕氣少く、稻かわきしべつよくして、中々風に吹きさらるゝ氣づかひなき也。○全體稻の形狀に委しからざるゆゑ也。抑、稻にかぎらず草木の細工は人間の目鼻手足ありて、働くに等しく、籾は稻の花なり、餘の花はうすくして早くちるなれ共、穀物の長たるものにて至つて大切のものゆゑ、花はかれても落る事なく存ず。先籾をよく見給ふべし、二ツ合したるものにて中に雌藥あり、雄藥あり、雌藥は子を孕みて米となす。雄藥は孕せて勢氣を傳へ、養ひをやる也。さて此雄藥といふは俗にすゝ花と唱へ、二百十日の頃籾の口より出て白く見ゆるもの也。是が五ツ又は六ツありて、晴天の節は籾が口をひらけば、六ツながら出て、陽氣をとり、夕方にははいりてたくはへたる所の勢氣を雌藥に傳へ、子を養ひしむる也。人間にていへば、女房が子に乳をのませ、だきかゝへて育れば、夫は家業をいとなみ、女房を養ふに同じ。誠に生活の物也。此雌雄は穂に雌穂、雄穂あれば、雌穂を撰びとりて、種子籾に貯ふべしといへる事を、櫻木に彫り



三八一  
て諸人に知しむる人あり。是は雌雄のわけをしらざる人也。雌穂に實あれば、雄穂は空穂なるべき筈也。僕が友人に此雌穂、雄穂などゝわけてあらざる事をためし、圖して弘められしが、後に阿蘭陀の書の譯したるを見るに、其説と符合す。則、銅板にしたる圖あり、又再種方といふ書に委しくしるしあり。扱其圖のごとく、籾は二ツ合したるものにして、其合口の所は二重の縁をとりあり、中などには骨ありて、いかなる風にも吹破られざるやうしたるもの也。日中は雄藥出あれども、雨ふらんとする時、自ら内へ入て口をとぢる也。又雨長く降つれば、幾日も口をひらく事なければ、花の時分

つゝきて日和あしければ雄薬出て陽氣を保つ事あたはざれば人間の物を食せず  
 とどこめられてゐると同じ事なれば雌薬に傳ふる所の食物乏しきがゆゑ其後  
 天氣快晴したりとも時をうしなひし事なれば子のそだちあしくよりて米は登り  
 わしく收納すくなく世間一統の不作とはなる也。かゝる委き天然の細工なれば  
 中々風に吹破られ切るゝ物にはあらず僕按ずるに貴公の所の稻は前にもいふこ  
 とく失禮ながら肥し乏しきゆゑに乾き田にすれば吹きさらるゝにあらざるや。成だ  
 け肥しをいたし試み給へかしたかたれば三州の男又いふ其利談甚だ感心いたし  
 候。水の落す所なき田はいかゞ致して落し申べきや示し給へといへば津の國の  
 男答へていふ水のおとしやうなき深田は致しかたなければ其まゝおくべし。夫  
 は水あかたまりて肥しとなるべし。溝を作れば水おつる田は水あか溜りても大  
 兩には水あふれて低きかたへ流るべし是は油鹽の二ツをあらひ流すなれば地や  
 する也。是等を以て考へ見給ふべし。僕兼てより歎かはしく思ふは貴公の國邊  
 より出羽奥州までは麥油菜を中深の田をかきあげ作る事をせず右いふごとく水  
 田にいたし一作のみとる事也。九州より畿内のごとく搔あげて二作取なば積り

ては廣大なる徳分成べきを前に云如く水田に致し置ざれば稻よく出来ざる事な  
 らば西國中國四國畿内邊の米はあしきはづなれども東國の米より勝れたるを見  
 て知り給ふべし。少々の商ひをして銀を儲けんより田に水をはれなどゝは往昔  
 の人のいひ出せし事なるが余りの戲言なりかならず信用なく二作取やう心がけ  
 給へ是天道さまへの御奉公なり。さて田水のおとしやうは拙者ごとき愚農が  
 云ずとも御存じなるべけれども爰に一二を述べし。先田の四方の稻株一通りか  
 三株通り根を引ぬき其となりの株の間にあげおきおせ際を一畝は堀あぐれば  
 水は低きかたへ流れて田面乾く也。または田の隅二株通り刈て其稻は掛ぼしに  
 いたし置其刈たる跡を鍬は堀通せば水は下へ落て乾く也。又農具便利論にも  
 圖のあるごとく厚さ三四寸幅壹尺三五寸長さ壹間の松板の真中に穴をあけ水の  
 おつべきと見ゆる低き所へ横に入置夫を扇の要をとり末ひろく扇の骨のごとく  
 幅三尺深さ三尺ぐらゐり其中に二かへ位手ごろの石をつみ入又石なき所に  
 ては松丸太の壹尺四五寸廻り位なるを四五本つかさね入て元のごとく土をき  
 せ下なる板の穴の所へ落行やうにして其板の穴の内つらには手ごろの石を五六

三三四  
十つみおき土をきせ栓をさし置田植して八月の末九月にいたり右栓をぬけば其  
穴より水悉くおちて田つら乾く也。此外乾しやうは各地方御ぞんじなるべ  
れば申に及ばずさて九州の人に申べき事あり御國かたの米は大坂にても上米の  
内にて米性もよく味ひも宜し然るに御はなしの通りの刈やう干やうなれば惜  
米を地氣に蒸させて米の位をおとし給ふものかな。右にも述ることく地中には  
燐硝の氣備れば日に照らされ地中の水氣立のぼるにしたがひ刈て地邊につけて  
干ある扱はことく湿氣に蒸るれば米の性うつけ艶を失ふもの也。湿氣はす  
べてのものをおとさすも也。然れば味ひもおとる道理也。何とぞ地に干事  
を止給ひ右にいふごとく稻機をこしらへ掛ぼしにせば能米性のうへ猶よくなり  
直段壹石に付三四匁は高直に成べし。然るときは其徳分かぞへ盡しがたし。掛  
干は手の入やうなれども其田の隅か畔の上にしらしらへ干て勝手に取かへり夜な  
べに家内にてこけば勝手宜し。又刈るにも日和を見合するに及ばず少々の雨天  
には刈る也。第一御はなしの通りにては地に干ある稻を大雨には數日ひたす  
事あるべし。以ての外のこと也。かへすくもかけ干にして試み給ふべし。さて

下總なる人に申べき事あり御地は十月霜月までも田を刈事なく置給ふよし御尤  
にて至極宜しき事也。僕思ふに是を今十五日か廿日も前かたに刈て唯今九州の  
御かたへ申通り掛ぼしにしたまは霜月までも置たるも同様にて實入十分な  
るべし。かやうに早く刈ん事をばすめ申譯はおそく刈ては麥まきを急げばす  
ぐに田をすきかへし生土をくだき麥を蒔ざれば時節おくる也。右云ごとく早  
く刈てかけ干にいたし置すぐに田を犁かへし十四五日も乾かしおき塊をくだ  
き地こしらへせば肥しとなるべき燐硝氣乾きたる土に發生すれば麥をまきても  
油菜を植ても生際よく始終のそだち方宜し。御國ばかりに限らず東海道筋より  
關八州を右にもいふごとく中深の田の分のこらず畦を高くかさあげ麥油菜を作  
るやう成なば百萬町の新田をひらくにも勝りて國益と成事大ひなるべしと語れ  
ば船頭の聲にて船が着て候御あがり候へといふに笠よ杖よ風呂しきよ脚絆わら  
んぢ脇差など、皆々かけあがりおのがさまも立わかれぬ。



編者云翠山  
 賦れに此編  
 を草し自畫  
 を加へて出  
 版の意あり  
 一掃百態  
 と異曲同工  
 なるもの積  
 未だ完結に  
 至らずして  
 奇蹟に遇へ  
 り或文は高  
 野長英の筆  
 に成れりと  
 傳ふ

つゞれの錦

傾城買息子傳授

本編は東京金港堂出版單行本にして同店の承諾を得て録載す原本は名古屋  
 古屋市熱田町鈴木滋氏藏。

蚊 蚊の睫に巢をくふ蠅 南溟に羽をのす 鵬なんほ天地はひろいじやとても大きい  
 にも程があり小さいにも限りのあるをまんざら啞としらがの丈人もと列子にあ  
 り。 莊子にかくと啞に又啞の方人それ程啞が是ならんには五百弟子の數よりも  
 かぎりしられぬ客の敷衣のうらのたまさかに口ゆがめたる譬喩方便せうことな  
 しの世渡りのうかれ女のみを非とやは答ひる。こゝにひとり狂儒生あり一盃  
 のめば夢蟲のからきを忘る。習ひにおなじくもんぜん蓆に肘枕世をかるしたる  
 氣儘ものなるが何思ひけん訪らひ来てこれさと膝を擲いていへらくいらぬお世  
 話な事ながら人界の其中に又一界の遊女界天人の五衰とはちと方角のちがふた



辛巳畫稿の中より

翠山筆

編者云畢山  
戯れに此編  
を草し自畫  
を加へて出  
版の意あり  
蓋一掃百態  
と異曲同工  
なるもの稿  
未だ完結に  
至らずして  
奇禍に遇へ  
り叙文は高  
野長英の筆  
に成れりと  
傳ふ

つゞれの錦

傾城買息子傳授

本篇は東京金港堂出版單行本にして同店の承諾を得て録載す原本は名古屋  
古屋市熱田町鈴木滋氏藏。

敘

蚊の睫に巢をくふ蠅、南溟に羽をのす鵬、なんほ天地はひろいじやとて、大きい  
にも程があり、小さいにも限りのあるを、まんざら啞としらがの丈人もと列子にあ  
り。莊子にかくと、啞に又啞の方人、それ程啞が是ならんには、五百弟子の數よりも、  
かぎりしられぬ客の數、衣のうらのたまさかに、口ゆがめたる譬喩方便、せうことな  
しの世渡りの、うかれ女のみを非とやは答むる。こゝにひとり狂儒生あり、一盃  
のめば蓼蟲の、からきを忘るゝ習ひにおなじく、もんぜん蓆に肘枕、世をかるしたる  
氣儘ものなるが、何思ひけん訪らひ來てこれさと膝を擲いていへらく、いらぬお世  
話な事ながら、人界の其中に、又一界の遊女界、天人の五衰とは、ちと方角のちがふた



辛巳畫稿の中より

畢山筆

る六道の外なれば、佛も見おとしおかれたを、ふびんさ餘ッて小冊に、この頃綴つて見た所が、色をも香をもしる人は、和尚ならではたれかはあらむ。そもくこの一世界、六塵の樂欲を、丸でかためた人形彫ならべた天窓は、御好次第、御意にいらすばこちらにもと、澤山さうに扱はるゝは、誰に見シヨとの紅粉鐵漿ぞや。皆尊屬へのしんぢゆだて、とはいひながらあだ浪の、あだにはあらであく夜なく、信實にあふのも折々は、ありとは聞けどかならず悪縁、半襟かけて着て見せて、寝まきのきぬの肌うすな、女房氣取がしばしのなぐさめ。最う何年で年があくと、かぞへて見ればゆく先きは、來しかたよりはまだ長し。とてもそはれぬ妹と春の中にながるゝよしの川、よしやと二人つれだちて、きのふの花はけふの夢と、新内ふしにうたはるゝが、せめてこの世の思ひで、なんとあはれなはなしじやないか。水一柄杓硯にも、おのれ今こそへまひしよ入道、貸本の落書にその俤をのせらるれど、あはれ昔は洒落本を、一切經の輪堂にひとしく、ぐるりと廻りに積み並べて、邵康節が詩にいはゆる、書をはむ魚のたぐひなりしかば、久しふりにて若がへり、いまは選者の片棒となり、うち思ふことこ

ゝにいはいむ。彼の奥州が挑灯にてれんいつはりなしとかけりしも、子持高尾がおのが子を、手たづさはりてありきしみち、現金の正札を、面へ出<sup>だ</sup>して見するに似たれど、胸の仕入の元帳には、なんと符帳のしるしありしにや。二ッ襠三ッ蒲團、たがへり見にかゝりけむ、衣桁の浴衣手拭の模様も蝶の襟もとに、つきの出汐のでどころがなければたらぬ五尺の體、初會ばかりですみのえの、岸におふてふ草の名の、ただ忘らるゝものならば、もん日もの日をいかにせまし。ものゝあはれはこれよりしるにや、茶屋船宿の手前もあれば、すこしのためにもなら山の、兒ノ手柏のうら馴染<sup>じみ</sup>、とにもかくにも黄金の光り、おくり迎ひの愛相に、又ほだされてつい一度、二度の月見に夷講、つられてこゝに明すとも、遊びと云字の筆法忘れず、草書に書く譬にある、居續無用の一行ものも、小便しながら氣をつけて見よ。幾久敷と敷ぞめの、蕎麥にはあらねど、細く長く、通ひくるのは、道芝の、露になぬれそめしませと、いづくの里にも駕はあれど、君を思へば歩<sup>あ</sup>行はだし、あしの一よの情々をしらば、廻し枕にふし柴の、こりくしたる時にあふとも、けふばかりかはあすか川、淵瀬かはらぬ中ならば、腹もたつまいたゝせまい、おもて梯子をきげむよく、おりはおりたが魂<sup>たま</sup>は、引と

めらるゝうしろがみ、君が再遊いつしかと、春中たゝいた桐一葉、いづれか秋にあはむとも、しられぬほどこそ遊び。紅毛文字は解<sup>あ</sup>せぬがゆかしく、小説文は讀<sup>よ</sup>ぬがよし、よめて見たればやッバリハ、ア、百夜かさぬる深草の、鶉の床のおきふしに、ないて別れ的一幕燃るあかりのつかぬ間に、三ッの車の方便もて、まづ大道に引あげむ、子供あそびも遊女狂ひも、あふないことはこのましからず、さればそこには口傳有と、ゆゑよししてこゝにさとせる、選者の辯をよく見てしれ。

かく云は神風の。伊勢屋の藏に衣も袈裟も。業の繩めにかゝる迄遣ひはたしてめはさめたれど、いまさらなんと小阿彌陀佛。

『啞を虚言<sup>うたがひ</sup> それ程啞が是ならんにはをさやうに虚言が是ならんには 蓆<sup>ござ</sup> いまだ字をならず 世をかるしたるはかるしめたるか 人界を 人間界 尊屬<sup>そんじやく</sup> やはりかなながよし 信實<sup>しんじつ</sup> 實にてよし 最<sup>も</sup>うよし なんとあはれなはなしじやないか 一句可刪<sup>いっくせん</sup> へまむしやはりかたかながよし なんと なのとよし とにもかくにも かさねくよし 草書に 草書でよし 綱は綱籠<sup>かご</sup> 紅毛は和蘭』

## 自序

女郎のまことは客のまことより生じ、客のまことは女郎の勤より出づ。もてるは襟もとにつくもあれど、大かたは客の情により、ふるるゝは懐の輕きによるがあれど、大かたはうぬぼれ見えばうときさなるふざけにあり。誠はうその皮、うそは誠の影、誠を見せてうそをあきなひ、うそがかうじて誠となる、うそから出た誠でなけりやねがとけぬとは忠臣藏のことばに見え、傾城に誠なしとはわけしらぬやぼな口からいきすぎなと明烏夢泡雪に載せたり。つらくおもんみれば昔者大王好色、昔者大王好貨は齊宣王を道にひきいれんと、うそ、孔明が留守をつかひしは劉玄徳の心をためすうそ、うそのしなはさまゝあれど、善と惡とのわかれぐち、君子も小人もそのいりぐちは御隣にて、これを軍事の爲にすれば謀計といひ、これを衆生の爲にすれば方便といふ。拈花微笑や西來意、庭前柏樹、狗子佛性、有りといは、ありのあたまに花もさくべく、無しといは、なしのきりぐちにたねもなかるべし。されば佛あれば衆生もあり、衆生もあれば傾城もありて、柳は緑花は紅のいろく、自然法爾の清風明月、非自然非因縁の翠竹黄花、迷悟は不二、邪正は一如、一の草も名

にはよしあしとわかれ、一の果をなしともありのみともいふゆり。さらば有るとおもひて尋ぬる人は、春の野のかげろふの無きにまよふべく、無しと思ひすつる男は、秋の谷のやまびこの有るに疑ふべし。傾城にまことなしといは、御客に情有有りや御客に情がなくば、傾城にまこともあるまじ。誠があつて運の盡き、ふられてかへる果報ものは、はじめから裸になりつなれば、何のたわいもなかるべし。されば御客も傾城もその時ぎりの誠にて、いやな客にも身を任するを傾城の誠といふべく、そのうちにたまゝに誠のあるといふは、海棠の香ひに比すべし。息子衆このところを合點にて、女郎の誠を得んことを欲せずして、たゞその情を買はんとせば、傾城の實情にあはんと百中の一二なるべし。作麼生か花につこり迦葉のさとり、不可説不可説如是如是と、なんだかかだかしらねども、向六道四生中、遊戯三昧喝とやつては見るものゝ、欺くにその方を以てせられなばこの△もやはり同前。それも一度はよしの山花のさかりが二度あるものか、御免候らへたわいわい。(天保八年あたりより一とせ前なる年のひたいの卯月十九日居續の退風に欠伸するいとま、醉ざめの冷水に筆を洗つて、たれもたのみもせぬに書す。)

倚翠亭 柴戸 誰也 良

コノ書ヲ品  
川ニテヨミ  
テキカセタ  
ル時ニソノ  
表子ノイヒ  
タルコトバ  
テ批評トシ  
テ記ス

### 傾城買息子傳授

三九二

傾城買はいかほど親がとめたりとも、その年ころになりては仲間のつき合ひか何か有りて、いかなるかたき息子にても一度か二度は必あるものにて、そのさきはその人々の心くといふものなれば、人の親たるものはたゞ一がいにとめたるばかりにてやむものにあらずといふ事をよく勘辨してそれに溺れぬやうに異見するこそ肝要なれ。さて女郎買をする人は、くれぐれそれはあそびにてかれはつとめなりといふ事を第一に心得べし。われはあそびなればくれぐれもきげんよくあそぶべし、かれはつとめなれば随分つとめよきやうにつとめさすべし。かれがつとめにくければ、おのづからつとめもおろそかになる故に、われもおもしろからず、おもしろからねばあそびにもならぬなり。もとよりたれも女郎買を商賣にするものとはなく、われも人もたまぐのほやう一ぺんなれば、あそびといふ所が第一なるを、がうはらにやして歸るといふは損の上のたわけにて、再そこへ

ゆかぬとてかれが方にては何ともおもはぬなり。されどそのまゝにては内證むきのやうすがわるき故、ぎり一ぺんに御定り文句のふみをよこすなれど、内心にては桑原々々萬歳樂と觀念して、どうぞあの客のこぬやうにとおもふなり。そこをぐつと承知して、女郎買は一時のあそびにて、もとより夫婦中にも戀中にもあらずとのみこみ、十のものをこちらが六分、むかふが四分といふやうにすれば、むかふにてもきのいたまぬ客とおもひ心をゆるし、外の客にいびられるたびくその人の事をおもひ出し、いやな客ばかり日々かさなる時は、どうぞあの客をよびて夜一夜ゆるりとやすみたきとおもふより、おのづと勤も身がいら傍輩たちのより合ひばなしにも何となく口ぶりよくいひなす故に、人にもなぶられその客のくるとしらせの時には、指にてつゝかれ背うたるゝやうになりては、いつとなくわれもその氣になりてより、おもはず實情も出るものにて、はじめより實をあらはすほどなすいた御客といふものは、つきだしのその日より、年あきの末までにつけて一人もなき事なり。さて傾城のつとめといふは、夜ごとにかはる枕のかずく、夫婦中か戀中にはうれしくもあらうなれど、つとめの身にはありあまりたる事ゆゑ、何の面白

マサカサウ  
デモアリマ  
セシ

オヤドウイ  
タサウ本ニ  
サウ見エマ  
スカネ  
エ

實ニサウデ  
アリマスヨ

ホニサウ  
デアリマス

くもなんともなく、又してもくくとおもふばかりなれば、眞實をいつてしまへばおよしなんしといふのみなり。それもれなじみの客になりては一がいにさうもあるまじけれど、初會の客に何のその金にも心いきにもてんからほれるといふ事はなく、もとよりかほにといふ事はとてもなく、たゞ商賣一ぺんにて、外のうりものかひものならば、それほどうりたくないものはたゞ今きれもので△い口といふべき所を、さすがはさうもいひかねて、身を任する心のうちを考ふれば、よほどの勤ならずや。

それもたかゞ女郎はうりものかひもの、むかふは親方への奉公にて、一夜ばかりはこちらのからだ、何としやうも自由なりといふも一わたりは尤なれど、かりそめの手枕かはすも情が第一、まこといふても夫婦中にも戀中にもあらねば、たかゞ遊女のまことには、その御客を面白くあそばせ申すより外はなし。

さればはじめから夫婦にならうといふ遊女は、はじめからうけ出さうといふ御客のないと一對なれば、白人の色戀とはとても別ものにて、眞實ほんたうにすいたといふにはあらねど、すこしもつとめよい御客はどうぞひきとめたくなり、何となく

マコトニ感  
心デアリマ  
スヨ

その人の來るのを心まちにまつやうになりては、勤にも身が入るのみなり。もとより傾城のつとめは、夜ごとにかわる客のかずかずに、内心はともあれ表はみんな色と戀中、あちらへもこちらへも、どうやらかうやら同じ事はねばならず、それに一々まことをつくしては、身一にてはしやうなく、もとより身も心もつかれては、歸るとどうなと勝手におしなんしといふより外はなし。女郎はうそつくまことがないと客のいふなれど、うそをつかずにしらしちやうめんのまことをいはゞ、色も香もなく花も實もなし。てれんにもてくだにもあらず、みんな女郎のつとめなり。それを夫婦中かなんどのやうにやきもちやき、腹たてるもあんまりこけなはなしならずや。

されば眞實ほんたうにすいた客はなく、たゞ初會にても心のおかれぬ勤めよき客あり、なじみかさねても解けにくきありて、人いろくさまくなれど、大がいはさほどかはつた客もなし。それをとやかにおもふは、大きなうぬぼれならずや。それもたま／＼は年季をいれあげ裸になりてよぶ客もあれど、さうなりては兩方ともに身のつまり、傾城にまことがあつて運のつきといふ古人の金言にあたり。

されば女郎買はよせにはあらず、二天作の勘定さへよくば随分にかようべしたとへその夜はふられても、曉のきぬに、さのみ腹もたてず大やうな客にはおのづと氣の毒になりて、心からかさねてよぶ氣になるなり。さりながらわれも大切なる金銀をつかひて、その上にふられては、いかなる賢人君子にても快きものにはあらず、とてもふられたがふしやうなれば、これも果報とあきらめて、ずるふんをとなくすべし。かならず道具をうちこわし、疊のたて糸をきり、夜具にきずつける類のわるいたずらをなすべからず、人目こそは立派なり、千筋の涙の糸をあつめてつくりたる物どもを、こわされては、いかにもつらくおもふべし。さやうのなさけなき心にては、色ほかにあらはるる道理にて、おのづといやがらるゝものなり。それ故ふるゝ客は、大かたいづれにてもふられ、もてる客はどこにてももてるものなり。またわれもたまゝのあそびなれば、せつかくきげんよくあそばんとおもふならば、別に傳授も口傳もなく、たゞすらゝと大やうにあまりとりつくるはぬがよきなり。また屏風のうちのあつさりとした客は、その時は損のやうなれど、かれが勤めよき故に重ねてのちぎりに身が入るものにて、それよりおもひの外の

深き中ともなるものなり。またいかに客がかまはずとも、全くむだにかへるといふ事はまづはなきものなれば、さやうの所をよくゝ考へて、うぬぼれをせず、めかさず、すまざず、色男ふらずに、内に居てよめもらつたやうに思つて居れば、申分はなきなれど、もとよりわれもあそびなれば、さやうに氣がねくらうばかりして居てはあそびにもならぬ故、たゞわるふざけせぬやうに心がくべし。また女郎はうそつくといへども、もとよりこの里へふみこむものは、はじめよりだまされに來るのにて、だまされねば何のけもなし。されば御客となりては、たゞこけにされずに、面白くたまさるゝやうに心がくべし。またうそをつくとはいふは御互にて、われとたちかへりてみれば、相應に男もまけぬものなり、初會の夜にははじめ顔を見合ひたるのみにて、いまだ心をしらざれば、互に深くおもふべきはずもなく、殊に女はなれゝしきといはれん事をはぢて、何ともいひよりがたきを、男の方よりは千々のちかひをたて、また來ん日を約しなど、はかなきことゝしりつゝも、それを縁のはじめとして、いひかはし契りかわすは畢竟は男のうそなれど、さうなくては月も花も無し。



また男の私語にも、けふは親また主人傍輩の目を忍び、不義理をなして來たり、この末々いかになるやらなど、有のまゝにいひてはあそびはできず、またいかにあとはらのやめぬ時にも、よく／＼考へて見れば、どこにか十全なる事はなくて、しおちもあるものなり。それをその通りにいひてはあそびはできず、また表子の勤が少しやそつと氣にいらぬとて、その度々にとりかへれば、後々は勤むる女郎もなく、おくる茶屋もなし。

さればその氣にいらぬふしをいさゝか男の方にて用捨すれば、ついにはさきから氣の毒になりて、思ひの外によく勤る事もあるべし。されば男がしらにいひてあそびのできざるは、女郎がしらにいひては、勤ができぬと同じことなり。されば人間萬事うそでかためたる世の中を、たゞ人の爲めにならぬうそはつかずに、彼にも我にもあまり障にならぬうそばかりをつくべし。この外に傳授も口傳もなき事なり。

關戸曰、くるわのかけひき、なじみのしこなし、まぶぐるひ、實とうそとの手くだのしよわけから茶屋ばいりのこんたんまで、そんならこゝではなそかへとあるを一篇

の序文とす。

ある遊女のものがたりをきくに、ワツチラン商賣はあまり多情にてもゆかぬ事なり、眞實その人をいとしくおもひ、身あがりをしてよぶやうになりては互の身のつまりよし、それほどならずとも、多情にてはその人をかばうやうになりて、無心をいふ事もできぬものなり。兎角にいやな御客でなければ爲にはならず、勿論いやな御客なりとも、それがどうなりてもかまはぬといふにはあらぬどいやなおもひをせしかはりとおもへば、無心もいひやすきなり。またワツチラン商賣はいきにてはいかぬ事なり。きめえが面白いといつてあがる客も随分多けれど、それはみんな裸な御客にて、畢竟はこつちの損となるものなり。また御客によりて、大さうにやさもちをやくもこまりきつたものなれど、またあまりやかぬ御客ははりやひなく、此の方にも心におこたりの出來て、マハシなどの多き時はおのづとまはらぬやうになるなり。すべて御客となつて來る人の、さのみかはつた事もなきなれど、たゞ大やうに奥そこに情ありて、ホット息をつかせる御客には、われも何ゆゑかしらねども、その近くなるにつれて、眞實はれ／＼となるものといへり。

われもはじめは大通にてもてるものとのみおもひしが、今になりて考ふれば、決してさやうのものにてなく、すかるゝはずにてすかれ、きはるゝはずにてきはるゝなり。その面白みの所になりては、あながちに金にてもなく、心いさや氣まへにてもなく、勿論かほにてはなほなし、されど大かたは

口切りや汝をよぶは金のこと

傾城もよくけをさればわが心

ほれ薬佐渡から出るがいつちきく

手近くにいへば口舌も無心なり

色里はやはり黄いろの事と見え

昔の戀は來いの戀今の戀はもつて來いなり

今時の女はふとい竹の竿ものほしげなる戀もするかな

なつかしくゆかしくそして金とかき

御なつかしのまゝ、一筆しめし上り、まづとや御前様御事時々の御障もなう、御さえく敷御すまる遊ばし、何よりく御めでたくぞんじ上り。次にこなた事

かはりなうとは申ながら、日々御前様の御事のみにてといふ所より、どうぞく御やかた様の御しゆび御見合せ、くどうもくすこしもはやく御通はせなど、いふも、つまりはそこに落なるが多し。

暮のふみ三の切ほどあはれなり

さてとやのとこからのびるくれのふみ

ぜひともしよひは、ちよとく御めもじいたし申さず候てはわかりかね候、よんどころなき用事御座候まゝ、など、いひて來たる故あはて、行きてみれば何もさしたる事はなし。

用があるとしてよんだはうそよお顔見たさのはかりごと

など、そつりぶしでやらるゝ事常なり。

來てみればふみのうらみの十分一

戀といふ正味のそこはつまむほど

大かたふみには案文がありて、それをあとさきくにおきかへなどしてよこすのにて、大かたは同文言なるが、こゝに感心なる一義は、いづかたよりいくつ來たりて

も、全く同文なるは一もなし。これもまたふしぎなり。但歌などかきて來たるは、たま〜は同じ歌ありといへり。

晝は蟬夜は螢に身をなすかなきくらしつゝ、こがれあかせば

この歌のてにはを色々とかへて所々よりかきて來たりといへり、然どもこれは古今集戀の

あけたてば蟬のをりはへなきくらし夜は螢のもえこそわたれ

といふをとりて作りたるなり。われもなじみの所にてはふみの代筆もいたし、歌などもよみてやりたり。

うつり香をまたあふまでのかたみぞとわがころもでをいだきつるかな

をりたつ 田子

これと中根屋綱五郎 傾城花咲 二重衣戀占に

しよてはうはきであひぼれの、後は眞實いとしうなり、しゆびしてあふてかへ

す夜は、そのうつり香をそのまゝに、だいてねてゐるゆめを、ろ

とあるにより思ひたり。

病ありとて來らぬ人に

君がいま風のこゝちととだえしてわが身をさらに落葉にぞする

をりたつ 田子

さはりありてあふ事かたき人に

よそのあらしいかにふくともかはらじな君ばかりのみ松のみどりは

また

星の数ほど御客はあれど月とみるのはぬしひとり

といふ事のあるを、その同じ趣にてははえなしさらばとて、

八重むぐら八重にしげりてあふ人にわきてぞおもふ竹はこの君

また

古のひかるといひし君だにも君におひてはほたるならまし

鳥はさのみにくからであの雞がめかりせぬ、はやくうたふも客によると、明鳥夢泡雪にある趣を

心からよはを長くも短くもおもほゆるかな君とあだびと

またそのことには合せてよみたるがあり

傾城に實なしとは世間の人のよくいふ事さすけれど、アリヤーほんにやばな口からいきすぎます、どうして人の氣もしらないで、遊女だつて石や木じやありいすまいし、やつぱり女でありいすもの、ほれまいといふ起請でもかいておきやアしまいし、苦界するとしてせぬ女子じやとて、實といふ字の筆のあや、よもや二はありせまい。たゞ一すぢの女ぎにと、松代屋惣五郎永樂屋歌菊二世玉だすきにある通でありいす。勿論まことのない傾城もありいしやうけれど、そりやアてんぐのきいでありいす。

波の上うきたる戀といふ事はたれかいはきにおもひまがへて

これは明烏夢泡雪のことばを題にてよみたり

ぬしにばかりは實につとめとは思ひいせん、つらいつとめをしいすのも、こればつかりはたのしみにして居りいす

一夜とていもとせならぬかり枕さてもいもせのこゝちのみする

よくつもりてもお見なんし、わちきがだましたとつて、あんまりだまされるやうな

ぬしでもありんすまい、ほんに

かくのたますのとおしやますけれど、わしにかゝれるぬしじやないといふことのとほりでありんす。

よしやわがいつはりぬともいかにしてわがいつはりにまどふ君かは

こないだはぬしを客とおもひいせんもんさますから、つい外の客をしまつてから、ゆつくりぬしとつもるはなしをしいしやうとたのしんで居りいたしたもの、それにぬしも昨日や今日のなじみでもおあんなすまいに、人の氣もしらないで、ぬしがさうきづよくなさりいすといつそかなしくなりいす。

あふ事のなほざりなりしおこたりはいもせとおもふ心ゆるみに

ぬしに見かへる御客もありませんけれど、アリヤー内證に縁のある人で、それでよんどころなしでありいす。

君をおもふ心をしばしあだ人にかしつる事の心ぐるしさ

これらは所がら人がらにによせて俳諧體を帯びてよみ出せり、いにしへびとの男におくりたることのはによきのも多かるべし。

夏ごろもわれはひとへにおもへども君がこゝろにうらやあるらん 松葉屋

粧

とにかくに男は女を疑ひ、女は男をうたがふものなり。

たゞいても心のしれぬ西瓜かな

などいへるなほあるべし。

と、であやなせば、にのりそえて 初惠須

ふみのかきならひは、大かた姉女郎またやりて 所によりて または内證にてかく

なり、またふみづかひがみづからかいてもつてくるがあり、吉原にてふみかきの筆

雇料大かたひとひろにて三文か四文にて、かきどめの所を唾にてきりて、べにをつ

けてよこすなり。それを代筆としりながらもひきだされ、それより直書のくるや

うになりては身も世もあられず、心もそらになるといふはあやしき事なり。

つりばりのやうな、しで客をつり

また

のたくつため、ずをえさで客をつり

ともいへり

金銀をとられたあとの歩あしらひ

げにゆだんのならぬ事なり。

うしろから羽織をさせるたばこいれゆふべのことをわすれなんすな

蜀山人

また心いきでほられやうといふはおしのつよき事なり、さやうのうぬぼれのあ  
る所へつけこまれて十分にかきのめさるゝものなり。傾城に實なしとはみつ子  
もしりたる事なれば、もはやだまされてはなきはずと思ふに、わがうぬぼれる所  
より、外の客にはいかにもその通なるべけれど、われ一人にはまことをつくしてあ  
ふ事なりとおもふなり。これみなその位の事しらぬにはあらねど、わが身にうぬ  
ぼれる所のあるより、そこをおもしろくあやなさるれば、われもいつはりとはお  
もはぬなり。勿論

うぬぼれをやめればほかにほれてなし

といふ通なるが多く、兎角にないやうであるものはうぬぼれと花の香ひ、古川の水

あるやうでないものは女郎の實と怪談ばなし、黄いろにさくあさがほとたしかな人。

また氣まへといふはまづは齋の者などの境界なれば、畢竟うはきにて末のとげるといふは少し。されどこゝに一説ありて、町の親分などいふものは、子分子方を多くとりあつかふ故に、親方裸になつてまいりました、あねをよろしくたのんますといはれては、衣類をも道具をもたち所に典却して用だて、やらねばならねども、白人にてはそのきれはなれあしき故に、さやうの人の妻はそれしやあがりてなくてはならぬといへり。されば一がいに末がとげぬともいはれまじ。

顔にてといふはともなき事、むすめのうちはどうぞあのやうな人をとおもふ事もあり、新造のうちはこの御客はめつきがすいたとか、鼻つきがどうもいゝとかいふ位の好もあるなれど、傾城になりあがりては、男にあきはて、居る事ゆゑに、たとへ業平と源氏の君を○口マキにうち合せ、子都と潘安仁を卵とぢにしたりともいく事にあらず。さやうのいろ男はうぬぼれつよき故に、いつにてもさらはるゝものなり。すべて遊女にても女にても、第一にきらひなものはうぬぼれ、その次見えばう

きざ、わるふざけにて、いかなる色男にてもうぬぼれをだしては、あいさうをつかさるゝものなり。さて肝心のところになりては

男がようて金もちでそれで女ながほれるなら仙臺さんも高尾をころし

やせぬ

といふはやりうたの通なりといへり。至極尤な事であるべけれど、われもいづかたにてもふらるゝ事のみ常にて、その境界にいたらねばさだかには何ともいひがたきなり。

きざとは氣さわりの歌後語ウタゴトなるが、そのきざわりといふに、いやみをいふと疑ふかきの二ありて、そのいやみをいふ人は、それをいつかどのしやれとおぼえていふ事なれど、いはるゝ身にては堪へがたくして、いかやうに勤めんとおもひても、とかくいやになり、疑いふかき人はいかにしても疑ふ故に、しかたなけれど、それゝへの勤めやうもつまる所は屏風の中にあるべし。すべて腹たつ客をたらし、かたい客を落すこと、外に傳授も口傳もなしといへり。

琴碁書畫ならべたばかりしりいせん

これらもいはゞきざとなるべし。  
またさとくのかくしことばなどをたとへいかやうにしりたりとも決していふまじき事なり。さやうの事を少しにても知れば知り自慢にいひたくなりて、それにてふらるゝ事ありつゝしひべし。またついでにしるすわれもさとのかくしことばをつくらんとおもひて、ひとつふたつ考へたる事あり、いまだ考へ足らずして數少ければ徒にこゝにしるすのみ。

月のさわりを 峰の松

客のおちあふを よそのあらし

うらがへしを 葛の葉

また少曲コトマカにてもうたふ客は、藝者てれて座しらせるものなり。兎角に藝者にさわがせて、おとなしく見て居るのが客の上手にて、藝者にひけをとらせては、何の興もなきものなり。それゆゑ潮くみの一にてもうたふ人は、座中しらけてさびしく、酒も思ふやうにはまわらなくなるものなり。また極の下手ならばおかしみありて、却つて興になる事もあり、上手ならばその聲に深く愛らるゝ事あり、それゆゑ娼家

によりて藝人をきらふ所あり。

國ものは、いまだことなれざる野夫ノトなうちがよくもてるものにて、それよりかれこれやうすのわかるようになりては、人にきざがられてふらるものなり。されどやうすがわかるやうになりても、おとなしくだまされやすきはふらるゝ事なし。

まかりこしさんと浅木へ名をつける

名を一字かゝれて浅木うれしがり

浅木うら枕の紋をくどくきゝ

諸侯の國ものは多く浅木うらの衣をきる故にしかいへり、

人は武士なぜ傾城にいやがられ

何事ぞ花みる人の長刀

武士のあらごとすなり江戸ざくら

武士のもみじにこりず女とは

秋色

吉原で武道勝利を得ざる事

いやでならぬがナントヤラ、なさけないのが云々といふ童謡のありて、國ものはか

れをいとひかばふ心うすき故に、

女郎衆の氣にもならしやんせ

など、いはるゝ事あり。されどはじめのほどは彼がことばを真とおもひて、随分歩をはてふ故に、なじみの客のひとりもほしく、それゆゑ勤をいやとおもはぬなれど、すこし物がわかりかゝりて來れば、わるくすくなりいやみのみをいふゆゑに、ふらるゝものなり、これにつゞきて町家の手代など、たまさかにゆく身ゆゑ、兎角になさけなきとていとふものなり。その次三萬石以下の家來も、心ことば人がらあしきゆゑにいとほるゝなり。

二三年定府國府のあくがぬけ

ふみをみるにも、凡の下にひきかくしてひそかによみ居るに、人の來りて罷出申寸マカツテキス曾といはるれば御出オチヤシと願みていひながら結カねてしまふうちにはよし、人に見するやうになりてはもはやふられやすきものなり。さる藩中の、人のはながみに國産の御前も、た紙のふたつざりをつかひきりて、こすぎの紙をいれおきしを、人の見てオマ横毛ヨコゲ、毛波モリ也由、申マ佐サ奴ヌ彌ミ、ハンモ、モ、イゲマセンネ、といひたるよし、

氣やぼうすどん、情なし、手なしのくせとして、わるじやれいふたり、大通でたがにくらしいとういふ理窟か、氣がしれぬ  
と戻駕の文句どほりにいはるゝ事なり。

あの聲でとかげくらふか杜鵑

はりばこにもみのきれありばらの花外面如菩薩 内心如夜叉 馬琴

わるふざけをしたる客のかへりたるあとに、傍輩女郎わかいもの訪らひ來りて、くちくゝにのゝしるをきゝたりしに、なかゝゝ女のくちとはおもはれず、そこにてききたらんには、いかな人も面より火の出るなるべしとおもはる。

ほんの心でくる客さんを、いやとおもふもむりなれど、どうかすかねばその夜

のつらさ、榊酒屋小七 山科屋菊の井 浮名初紋日

實はいやと申すも物體なきことにて、初めよりあまたの中から目にとまり、それよりしげくかよふにつれては、色外にあらはるゝとやらにて、おのづからふづとめになり、また無心をいひかけて、それにも來るといふはよくゝの事なれば、それをそまつにしては冥理につきるといふものなり。また年あき前になりては、われ



も人も好まざりになりて、すこしにてもいやなお客はそまつにするものなれど、まこと年あき前が大切にて、なほさらにいやなお客をつとめねば、身のつまりになるものなりと、ある遊女の物語なり。

あぢきなくうき身をかざるさしぐしやさしもおもはぬ人をこふとて

千 枝 子

客のかよふは顔の爲なるがあり、名の爲なるがあり、勤によるがあり、さまへによるがあり、座敷のとりまはしによるがあり、また手迹などすべてその藝によるがあり、かうしやなる遊女は、その客の座つきのやうす物いひ等にて、この客はどこを目わてに、あがりたるかをはやく考へ知りて、それにて應對とりまはしをし、又茶屋にたのみて、その後言をきいてもらう故に大かた失なし。いかやうに客が初心ものに化けて來たるとも、階子をあがりてよりの足ふみにて、巧者不巧者はきつとしるものなりとぞ。

顔よき遊女は見たてにはづれず、茶屋にても客のわが方になじまん事を思ひて、その心にかなふやうに、大かた名をさして口をかけるものなり。されど顔を目わてにして來る客は、うはきなるものにて、大かたはとげがたきものなり。さればはやり子に不きりやうなるもありて、ものごと千差萬別なり。

よき女は或は自の美を鼻にかけて、それゆゑ客にいとほるゝ事あり。さやうになりては、茶屋にもにくまれて、だんぐゝ客もはなるゝものなり。

何屋の某といふ名によりて來たる客は、人にもものがたらん爲め、見えか又は物ずきの人なり。さやうの人は一は無限にて、長くとは來たらぬものなり。

また中には、いつまでも全く絶えたるにはあらで、をりふしは來たるもあるべし。勤によりて來たる客は、初はうはきなれど、後には深く迷ふ事あり、すべて何の爲にとて來たる客も、この所にては落る事多し。

さまへにはやさかたとキヤン俠とがありて、それを好む人の氣風格別なれば、茶屋にて客のやうすを見て、それイサハダにまくばる事なり。

やさかたは、大かたよき人に好かれ、俠は下衆に好かるゝなり。貴人などにたまたまは、俠なるを好くもあれど、それは奥方などの窮屈をいとふ人にて、下さまの性をうけたるなり。

御國もの學者など、皆やさかたを好むものなり。これらは深く迷ふ事あり。座敷のとりまはしがよきといひて來たる人は、多くは見えばうにて、大かたは同輩の人などをつれ來り、大さうなるうそ八百をならべたて、自分ばかりもてたつもりをしたがるものにて、さやらの人は随分ためにもなれど、長久なる事はなく、そのいふことみなたのみにならぬものなり。藝を好みて來たる人は、大かたは藝ある人なり、ふみをかきたる手がよきなど、いひて好く人あり、またよき手にては情がうつらず、愚癡もさのみはかき得ぬものなり。それゆゑ吉原のふみかきの筆雇は、ちんきんぼりのからくさのやうなるをたのむ事なり。

客にうぬぼれ、見えばう、きざ、又おとなしき人、老人などには、それふゝとりあつかひ方がちがふ事なり。まづうぬぼれは、かほか、金か、藝かにて、その根本をつきとめて好きたるふりをすれば、そのうそに自のうぬぼれが手傳つて、全く落さるゝ事あり。エモシぬしやアノ役者の誰かにそのまゝでありませよ、それでちつとこわいろをつかつて見なましなどいはるゝ事あり。

見えばうは、その二かいのあがりやう、あるきやう、着座のやうす、聲づかひ、せきばらひ、衣文を直しあげさせる等にて、直に見ゆるものなり。エモシぬしやどうもきれいであります、わちきアあの手さきや足などにあか見える人は、まことにいやでありますなどいはるゝ事あり。

おとなしき人、これまたたちる物がたりのしづやかなるにて直にしるゝ事なり。さる人へは手相墨色などをたのみ來り、或は歌をならひたきなどいふものなり。御國ものは傍輩などが内々にて、あの人は歌をよむからかういふがよいなど、つけ智慧をする事あり。

さて遊女にわが好むなる歌の事などいはるれば、忽に源氏の君が紫上を得たるやうにうれしくなりて、ちと來てどうぞ教なましなどいはるれば、源氏物語古今集などを懐中して講釋にゆくも、その身になりてはいと興ある事なるべし。

又おとなしく情ある人は、まさかの時の頼にもなり、又はうさをもなぐさむ時のあるゆゑに、その足の斷ん事を恐れて無心もいひにくゝ、さやらの人は身の上大切と省みる故、むだづかひもせぬものなり。

どこやらかたいとのたちの色のちがみが肝心の戀の要じやないかいな  
烏帽子紐トケテスル解トク寝夜ネヨ

兎角女に迷ふは、正直におとなしき人に多きものなり。その正直な人も、傾城に實なし、茶屋むすめころび藝者みな商賣の爲なりといふ事は承知して居れど、わが思ひたるにたがひずんと正直に無欲にしてこの身の爲になる事などをいひきけ、異見がましき事もいふゆゑ、さても傾城は犬猫同様と思ひ居たるに、深切なるものありけりとおもひ、それより深く迷ふものなり、傾城茶屋むすめ等みな多くの人をとりあつかひ、馴れて居るゆゑ、男の氣風をのみこみて、十人は十人の氣々によりて手段をする事なり。

それゆゑ無心をいはぬ女、又おくりものを斷る女郎にあひては、眞實本たうと思ふものなれど、それはまことは、いさゝかなる故たんとにしてもらはんと思ふ事なり。迷ひたる人の心は見通しに、女に見すかざるゝものにて、さのみ難くもなき事なり。もとより傾城に實なしとて、實なきふりをなさばどうして商賣になるべきや、またさやうの人を見れば、初よりひたゝと私情の如くにしかくる女あり、これは十分

に落す手段にて、他の客へ然せぬわけは、何屋の某は初會にかやうなりといはるゝが、つらき故にて、その正直な人は、深く迷ひて決して人にはぬ所を見通してする事なり。それゆゑ正直なる人は、遊女茶屋むすめころび藝者揚弓場等の搖錢樹カネノキなり。

わが朋友に、吾れはいづかたにても、實ある傾城にのみ買ひあたりたりといふ人あり。又どうでも茶屋女は女房よりは深切なりといふ人あり、結構なる人なり。

老人は、大かた新造をよろこぶものなり。これは氣がわかくなるとなり。その故アヘンナチユルキンテハ解トクシル難シ大かた遊女は、少づくりをするものなり、おかばしよにて、髪はしまだか又は一葉イチエフまげなどなり。おさふねは人の妻に似たるゆゑ、まづはせぬ事なり。遊女は妻のありて、それにあきたる人の玩なればなり。

ものがたりは、醜夫に顔の事をいはず、老人に年のものがたりせず、又他の客のうわさをせぬ事なり。傍輩などのよしあしもまづはいはぬがよし。

又宵は少々不勤にても、きぬゝをよく勤めたる客は、大かた來るものなり、曉に茶屋の迎ひの來りては、未練といはるまじきとて、大抵の客は早々にたつものなり。



り、又自は眞夫のつもりで金をつかひにゆく客あり、とほり一遍の客もあり。

傾城は月雪花の三ッ蒲團てらしつふりつ色にふけりつ

ある時は色にそみけりわかかえで

だまされて来てまことなり初ざくら

岩木ならねば然る事もあらずなり。

浅い心としら絲の、そめてくやしきおのれありしなからの一ッへ、小つまそろへ  
てしどけなく、風の柳の吹くまゝに、任せるはずのつとめじやとて、いやな客  
にも比よくござ

すべてものごとありのまゝに、いひては、色も香もなきものなり。氣にいらぬから  
ゆかぬといはるれば、女郎も一言もなく、だまして金をつかはするがこつちの商賣  
だまされてつかつたのが、そつちの籠想といはれては、この方にて言句もなき事な  
り。それをとやかくとして、さういはぬので面白くもおかしくもあるべし。

氣にいらぬ風もあらうが柳かな

傾城の賢なるはこの柳かな

其

角

いもせならぬ身には、別にしやうもなく、たゞいやな人をも面白く遊ばするよ  
り外の實ほなし。

天地ひらけ始りてよりこのかた、誠ある傾城と伽陵頻伽のをん鳥は、繪にかい  
たも見た者はない 其扇屋浮名戀風

女郎の誠と卵の四角あれば、みそかに月が出る 松代屋惣兵衛 永樂屋歌菊 二世玉だすき  
傾城に誠なしといふは、多くは誠の出るまで、かひとげぬ人なり。

傾城に誠なしとは、傾城にうそいふ客や、いひはとめけん 三馬

お客はどうそをつきなば、傾城もさぞかし人にくまれやせん

世がかはり客は廊下で舌を出し

客はどうそはつかぬ傾城

このころでは、御客さまがたが、じよさいないきやすめばかりいつて、お歸なさいま  
すわとある遊女のいへり。

まことなくてさへ人の迷ふが多ければ、それに誠ありてはいかならんといへり、こ  
れも一興ある説なり。

いかにその客に實をつくさんと思ひても、金をつかはぬ客はわれも紋日ものびその外衣裳などのくつたくに追はれて勤も懈り、またその餘の客をつとめねばならぬ苦勞などにて、實をつくしかぬるものなり、されば紋日ものびなどのせわになりてより、十分に心おきなく、實をもつくし得るものなり。

うそばかり遊女と常におもひしに、夜具の無心はまことなりけり

客の乞食になりたるを、女郎はたかみで見物して居るといへど、これまた遊女の身にては、中々わが方に通ふかぎりの客を養ふ事は力及ばず、是非なき事なり。勿論遊女の客よりうけたる恩といふは、君臣父子夫婦兄弟朋友の間とは異にして、彼がたい色を愛し媚を買ふ爲の金銀なれば、恩義に背きたりといふべきやうもなし、さればその見物して居るを怨まずして、わが放蕩の度なかりしをうらむべし。

青柳のまねけば動く心かな

誰也良

青柳のなでもうれしはげあたま

誰也良

常盤葉なる濱まつがえに雪ふればかたきも色のそまぬものは

千はやぶる神南備山のもみぢばのそむればそまる心なりけり

をりたつ田子

夜ざくらやつい朝ざくら夕ざくら

秀佳

それもたまはよかるべし。

吉原があかるくなるとうちがやみ

孝不孝ふたつならぶるぬりまくら

はし紙のできぬうちに、拍子幕チャオンとせざればあとの芝居ができぬなるべし。

孝行でうられ不孝にうけ出され

印判のふくさで母は眼を拭ひ

からやうでうりすゑとかく三代目

傾城といふ字が直に異見なり

吁嗟可畏可畏と古風にいふ、

うけ出して見ればあたまも春の鹿

やはり野におけれんげさうといふ諺に似たり。

おまはんとわたいでうちがをさまらず  
さてふられたる客のはらいせにする徒のさまくありて、その身になりては腹の  
たつも尤なれど、思ひ直して見れば  
初雪やあれも人の子たる拾ひ  
たゞ金とつていつたからに、御客様といはるゝのみなれば、さのみ夫ぶるもばから  
しき事ならずや。

誰也良

これもまた隣へはいるうはざうり  
これならば庭の花見てねやうのに  
けちな晩屏風の布袋還俗し  
しかのみならず丸薬をたゞのまれ  
そらねいりのつびきならぬ蚊にくはれ  
祐筆をやとつたやうなけちな晩  
はいふきに狸の尻尾けむつて居  
獨身のひとりねは、常になれたる身にては事にもあらず、二人ねの一人ねは、廓下の

足おとの耳につきてねふられるものにあらず、ましてたばこをすはぬ客は、精々、  
ろのない薬とりよりわはれなり。さやうの時には、いかなる賢人君子にても大か  
た腹のたつものならんとおもふほどなれば、さぞかしわるいたづらをしたくおも  
ふべけれど、

傾城にふられてかへる果報もの

傾傾にまことがあつて運のつき

といふ二句を口の中に吟じて、これも果報とあきらめて夜の明るをまつべし。  
果報はねてまてアホーは狸ねいりしてまつといへり。  
凡色里に落ちたるものは、苦界十年の間を指折りて待ちくらす事とおもふに、さや  
うの人はすくなく、大かたはまたくらがへなどをして、岡場所にてもつとめる氣に  
なるといふは、習の性となるのにて常人には解せぬ事なり。

青柳やははどちらへゆく事を 誰也良

ゆく末はたがはだふれんべにの花

ある遊女の、年があけなば身を任せんと誓ひし男の、親族よりたのまれて、その遊女

の心根を問ひに行きたりしに、外に心あてが七八人はあれども、それがみなはずれたればその方へゆかんといふ、それにてはとんだ事なり、さらばその通りをさきへいひておもひきらせんといひたれば、その事は何分あやまりなり、たゞしよく思ひても見給へ、われらを家に迎へて妻とせんといふはみな不量見の人なり、その不量見の人を相手とする事ゆゑ、とてもまつたうの相談はできぬ事なり。第一に約束せしは藏前の札さしの息子にて、よほどの大家なればわれもゆきたくはおもへども、その人に親もあり親類もありて、その人の一存にもなるまじく、ことに男はこゝに居るうちこそあれ、わが物となりては、さのみには思はぬならひなれば、いつなんどき心のがはらんもはかりがたく、さやうの時にはあとへもさきへもまゐりがたければ、われも丈夫にはおもはず。第二は濱町邊の武家にて、親も厄介もなく、夫婦ぐらしの氣樂なれば、そこへまいりたくはおもへども、屋敷には殿様も御役人も御同役もあるものなれば、それですむやらすまぬやら、八文字左りづまが御新造ともいはれたしとおもへば、これも不定なりと。段々かぞへたてられ、まことに尤なる事と感歎して、さきへはよしなにいひおきたりしが、縁のあればにや、遂

にその男の妻となりしとぞ。

どのうそがほんの女夫にならうやら

またある遊女の、人にたのみて、御傍輩の何某様に終身を任せたく、何分御口入頼みいるといふ、これは一興なり、あのやうな野暮な不男を思ふとは茶人か何かしらねども、あまりといへばものずきなりといふ、いや然にあらざるの給ふごとくかの方さまはいかにも野暮にて、不男なれど、今時の色男がたにては、末のところおぼつかなし。勿論苦界十年のうち、いろ／＼なる男にあひたれば、色男も何もめづらしからず、何分にもかの方さまに、御口入たのむなりといひしよし、これも尤なる事なり。この繡像は、東里山人の海道茶漬腹の内幕の圖と、ことばがきを多く用ひ、その餘の諸先生の奇案妙論を羅織して、この圖上の餘白を填むるものなり。ナント蝶々ぢやアないがとんだひしがいゝネ。

但東里山人の舊案は、圈の中の心の字を白くし、新圖は黒くせるを別とす

大門入口よりむかふを見通したる景

初會は心が客を前におき手をくみて考へ居る圖



そばにすひつければこのきせるあり  
ことばがき

客の心

この女郎をだきこんだらたてひくだらうス

女郎

ぬしはどうか見たやうでありいす

つらく、と古人のいひおきたる、淨瑠璃新内豊後ふし等より、しやれ本くさ冊子ま  
でを閲するに、妙論奇言多くして、或は愁帳に笑を獻じ、寒閨に春を潮するの妙あり  
て、かの白樂天や王建も指をくわへてひつこむべきの趣あれば、これを世間のやぼ  
たちにしらせざらんものこり惜く、さらばとてその各種をとりすべて、見む人は世  
に難かるべければ、これを戀衣つゞれの錦といふ一篇に抄出して、そのことのはを  
一目の下に盡さしめとせしかども、却て重複冗重になる所も多くて、狐白の裘のぬ  
ひ難氣なれば、今はそのことばどもをこゝの圖上に分布するものから、なほはじめ  
にものしたる文のすてがたきによりて、こゝに出す。

戀衣つゞれの錦

闇の夜も吉原ばかり月夜とて、嫦娥もこゝにすみ町やげに慾界の仙都とこそはき  
こえけれ。ゆきかふ客のその中に、しつほりぬるゝ春雨や、はれて戀路も秋の月、傾  
もとぞつと夏の風、ふられてかへる朝しぐれ、四季をりゝゝの花川戸、一夜二夜より  
三夜堀、ついしげゝの九十九夜、百夜にとぐるさゝめごと、そのいひぐさを淨瑠璃  
や、新内ふしや豊後ふし、青樓怨や竹枝詞も、かうしといへばやぼがたく、まがきとい  
へばやさしうて、ひく靜搔もよみとうた、そのことのはのくさゝゝを、單ひとくもんとしてひ  
しゝゝと、ひとつによする筆のあや、一目に見する八景の、六枚屏風たてまわし、待つ  
夜のてじなたゝみさん、こぬとあたればおきなほす、せひにこよひはこよゝゝと、な  
げたかんざし疊のへりに、ハットラれしやたつた今、夜の御出としら波のよするに  
ひとしき長廊下、ばたゝゝ入りくるちどり足、うれしやそれと見かはす顔、涙が對の  
眞なる云々、

神靈矢口渡道行の文句曰、傾城に苦はないものと見やしやんしたらまぢがいの云  
云、これ傾城の上のみにあらず、すべてこの世に生れ出でたる人のかぎり、みな苦

のないものはなし。そのうちに傾城は、夫もなく子もなく、いやな客はつきだしてもよければ、七夕の短冊がみかけながしの色にて、白人よりはよほど氣樂なるやうに見ゆれど、元日より大晦日まで、何だのかだのと苦のぬける事なく、初會には客の心をはかりかねて、その挨拶や勤方に苦勞をし、うらになりては、どうぞなじみになるやうにと苦勞をし、なじみになりての後は、末長くせわをしてもらひたくと、一人の客にてもその心中の機關カウケウのやむ事なきを、まして酒の上など、あしき客には壁に向ひて涙を偷みヌス、まわしの多き時は、廊下に汗を落す内證やりてへのきがね、傍輩衆のあてこと、一として斷腸ならざるはなくして、實にたばこのんでもきせるよりのどがとほらぬうすけぶり、ないてあかさぬ夜半もなし。人のながめとなる身は、ほんに辛苦萬苦の苦の世界といひたる通にて、銅脈先生が送人之質屋之詩に相逢問愁苦、無一皆不尤とあるが如くなるはあはれなる事なり。

市川屋蘭蝶 榊屋此糸 若木仇名草曰、粹も不粹も戀路には苦勞をするが習ひぞといふが、中にも私ほど世にあぢきないものはなし、親にそひねの夢にさへ、見もしりもせぬ人へうられくるわのうきつとめ、禿のうちの氣ぐらうは、ぬふる火うけを追ひおこさ

れて、ふみの使ひや返事さへ、長い廊下の行きかよひ、まぶの手引きや合圖のてれんきをもみうらの色に出で、やりてにつめられた、かる、その苦をぬけてやうくとみせへいづもの神さんも、かたびいきなる縁むすび、すかぬ客衆にいびられて、泣いてあかさぬ夜半とてなし。それが中にもたのしみは、たまくとせがまれて、涙を日は、姉女郎や傍輩衆にあてこといはれ、身ずまいもおそいくとせがまれて、涙をつゝ、むふり袖のとめればもはやとしまやく、だてもいきぢもまけまいと、きばる胸のしやくつかへ、思へば、男ほどわがまゝらしいものはなし。無理な首尾してよんだ夜も、あちから恩にさせるより、つまらぬ事をいつのり、くぜつはあすもかへされぬ、しかたとしれど、こちも又とめて苦をやむうれしさ、が、劫じて今の身のつまり云々。

これ禿だちよりの苦勞をよくいひたる文なり。そのうち初會にも、中根屋綱五郎 傾城花咲 二重衣戀占曰、おまへがわたしにあひたいといはんす時のうれしさは、とびたつむねをおさへた返事。

松枝 源太 曰、初の御見グシにはれた客床へもおそうゆくはずを、一座の前も何のその、あすな

ふらりよとまゝにして、心でやぼな床いそぎしごきもわきへなげしまだ枕の下へ  
やる手さへ、つとめぎはなればからしい、女郎冥加にかなひしとたのしむわしを々、  
などいへる客もありて、

初手しよてはうはきであいほれの、後はしんじついついとしうなり、綱五郎花咲しよてはた

がひに客であひ、それから後は色であひ、今はしんみの女夫あひ、舟波屋七郎兵衛ひや

のうはきがとゞはしんになり、客をかけるはつとめのならひ、梅川忠兵衛

そもあひそめし初より、末の末までいひかわし、互に胸をあかし合ひ、何の遠慮も内

證の、世話せられても思にきぬ、本の女夫とおもふもの、河原達引段初會なじみの居

つゞけも、わたしやおまへを客人と、ほんにおもはぬ心から、これこの様にねまきに

も、半そりかけてきて見せて、女房さどりがにくいかへ、四天

といふやうになり、

あさなゆふなの身じまいに、傍輩さんがたてんくゝに、すいた男のうわさにも、わた

しがおまへをいはぬ間は、客の座敷に出て居ても、ほんにしばしもあらばこそ、外の

勤はいやましに、思を深くそめこみし、はだぎの紋に眞實の、うそでない氣をさとら

して、折酒屋小七山科屋 あれきかしやんせぬしの事じやとなふられて、かほではら

たて心では、いつそうれしとおもふほど、むねにはいへど物はいはず、梅川忠兵衛

といふほどになりては、

もしや外への悪性かと、千々に心をもみうらの、かへすくぞ、ぞはもに物おもひ、代松

屋惣五郎永樂屋歌

外にももしやと疑に、せなか合せてねて見ても、ついそれなりにはりよわり、中なほ

りすりやわけのかね、にくうてならぬ鳥の聲、なんの鳥がいぢわるで、なくぢやなけ

れどきぬく、のいなせともない心から、まゝにならぬが色のいぢ、藤屋伊左衛門

名戀風色のいぢは戀

わたしがおもふ半分も、おまへの心にあるならば、うかゝはまりしも本望じやと

いふものゝ、ねがすいたゆゑいろくゝと、愚痴なうらみにあいそがつきやう、何の道

からどういふても、たゞこなさんがいとしい、わるうきいてくださすなと、わけも

なみだのくどきごとしねしなうとの中、さへうたがふ女のならひにぞ、するもほ

れてはやぼよりも、くだらぬ事いふものならし、池のや義介津田屋歌波といふやうに

なるより。

そのおすがたを見送して、大門ぐちに立わかれ、おかほの見ゆるまがりとを、まつ氣  
になればはてしなくも、はや見えそなものと、びわがるうちとほらんす、う  
れしやおかほと見かはすまも、はや行き過しおもかげの、見えぬつらさにほんにま  
だ、いひたい事があつたものと、又見るかほをまちかねしに、升酒屋小七小科屋菊の井  
浮名初紋日  
おしてとめたきあさごとの、わかれのむりなおことばに、わたしがつよくさからは  
ず、ずぬなおまへの御心も、かはりしやんすであらうかと、おのゝものゝにまぎらし  
て、かへす思ひはかたいたの、むすんでとけぬかなしさは、人にしられぬむねのうち、  
藤のや喜之助ひしの  
や早衣藤杖戀の櫓いふてかへらぬ事ながら、かならずあすはかへらんせといふた  
は二人がいつまでも、あいとはしたい心ゆゑ、宵の返事にうらがへし、雨がふるとて  
あくる日も、いとしかわいのかずくが、つもりくし雪の朝、つい居つかけがくせ  
になり、音羽丹七  
傾城音羽瀧

あちらむかえすひぞりから、口舌はあすの居つかけの、たねとなつたが御身のあだ、  
朝鮮屋新七和國屋  
錦木唐模様形見振袖

といふやうになり、それより、

わしといふものないならば、かうした身にはならんすまい、中略しげくあへばおや  
どのおしゆび、あしきは胸にしりながら、すいたが因果つかの間も、そばはなる、が  
いや、まして朝のかへりもまだはい、今一ふくとだきしめし、そのことのはが居つ  
づけと、しげりしゆゑにおまへの身、あだとなしゆくかなしやな、たまきや伊太八  
さかいや尾上  
おかほのやつれを見るにつけ、おやどの首尾はいかやと、あんじすごせしかひも  
なや、無理は男の常なれど、いひわけするは女子だけ、いふてかへらぬ事ながら、おま  
へにわかれて早がらすの、なくまも生きて居らりやうか、藤のや喜之助ひしのや  
早衣藤杖戀の櫓  
といふ類より、

かうしたつとめのその中に、ものび節句も相應に、茶屋船宿のつけと、け、やりて禿  
のしきせまで、おもてむきをばおれが名で、みんなそなたの二面づく、送つて出やる  
はだうすな、姿を見れば胸一ばい、昔の身ならどのやうに、しやうもやうもしつたれ  
ど、この身になつては一言のことばの禮より外はない、中略こんどの事が首尾してか  
ら、さきへ行きやれば玉のこし、わが身の出世とよろこぶぞや、ふつくうらみと思

はぬと、たまきや伊太八

と男のいひたるに答へて、

いかに流れの身じやとても、心に二はないわいなたとへ私がうけ出され、御しんぞ様のかみ様のと、人にかしづきうやまはれ、上見ぬわしでくらしでも、いやな男にそひなして、朝夕くらするよりも、やつはり二人が手なべさげ、手づからわしがまゝ、たいて、内の者よこちの人、あすはどうしてかうしてと、いふがたのしみわしやうれしい、同上

といふやうになりては、夢さめざやの一こしといふ所になる事暫時なれば、くれぐれもおそれつゝ、しまざるべからず。

傾城に誠なしとわけしらずの申せども、それは皆ひがこと、わけしらずの詞ぞや、誠もうそももと一ツ、たとへば命なげうち、いかに誠をつくしても、男の方より便なく遠ざかる、そのときは心やけにおもひても、かうした身なればまゝならず、おのづから思はぬ花の根びきに合ひ、かけし替もうそとなり、又はじめより偽のつとめはかりにあふ人も、たえず重ねぬる色衣、終のよるべとなるときは、始のうそも皆まこと、

かく、たい懸路には偽もなく誠もなし、縁の有るのが誠ぞや、忠兵衛 梅川冥途飛脚年があいての樂みは、やがておの字の名をついで、二日酔せぬ身とならば、すあしもやぼなたびになり、つめるを常のこの指に、いと針もちて物ぬひならひ、はだぎしたて、きせて見て、とのこのたけに眞實が、とゝかば本にうれしかる、そしてかうしてどうしてと、まゝになる身かなんどのやうに、新曲 高尾 懺悔

ある時は柳はつかし夜半の風

誰也良

相傳有狎一妓者、相愛甚然、欲爲脫籍、則拒、不從、許以別宅、自居禮數如嫡、拒益力、怪詰其故、喟然曰、君棄其結髮而暱我、此豈可託終身者乎、紀的 姑 妄聽之

## 華山全集第二卷終

嶺山全集第二卷

大正三年十二月廿八日印刷  
大正四年一月十日發行

嶺山全集第二卷與付  
正價金二圓

不許  
複製

編輯者兼  
發行者

名古屋市中區福宜町乙百二拾六番戶  
鈴木清節

印刷者

東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
植田庄助

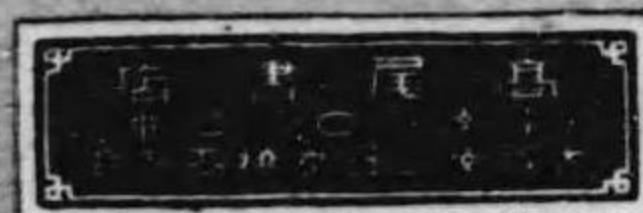
印刷所

東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
東洋印刷株式會社

發行所

愛知縣渥美郡田原町大字田原一番地  
華山會

2073



2073

335  
93



終

